

## 〈解題〉

『盆石皿山記』<sup>（ほんせきさらやまのき）</sup>は、前編が文化三年、後編が文化四年に江戸書肆・住吉屋政五郎より刊行されたもので、馬琴の中本型読本中では最も大部の作品である。構想も他の作品に比べて複雑になつて居り、趣向も凝らされている。まとまつた作品論は未だ備つていなが、従来「伝説物」と分類され、題材として皿屋敷伝説・鉢かつぎ伝説・刈萱桑門伝説が指摘されている。

自叙には『古今和歌集』卷第二十の「美作や久米の佐良山さらざにわが名は立てじ万世までに」

（一〇八三番歌）に見られる古歌を踏えた借辞が見られるが（『古今六帖』二や『太平記』四などにも引かれている）、美作国の久米更山という場所は「皿」から得た着想であると思われる。錦織、佐用丸等という登場人物名は付近の地名に拠つたものである。

又、「盆石」という標題にも関連する〈繼子譚〉が色濃く採入れられている。「紅皿欠皿」（話型としては「米福粟福」）よりも寧ろ「皿々山」と呼ばれる話を利用している。殿様が盆皿を見せて歌を詠ませ、実子に比べて上手な繼子の方を城へ連れて行くという話柄である。『日本昔話事典』（弘文堂、一九七七）では「歌の功徳」という項目で〈歌徳説話〉として解説されている。

一方、『日本昔話大成』卷五本格昔話四（角川書店、一九七三）には「十繼子譚」に詳しい記述があるが、「娘と田螺」「繼子の椎拾い」や「繼子と井戸」と呼ばれる話型もある。さらに「鉢かつぎ」も繼子譚に属する話型である。

馬琴がどの様な資料に拠つたかは詳にできないが、昔話や民譚などから、此等の繼子譚を集めて趣向を凝らしたものと考えられる。

一方、「皿」「井戸」に関連のある伝承として「皿屋敷伝承」を採入れた。『播州皿屋敷』として人口に膾炙した話を踏まえながらも、伴蒿蹊『閑田耕筆』（享和元）卷二に所収の話を利用した様である。

○上野國の士人の家に秘蔵の皿二十枚有しもし是を破ものあらバ一命を取べしと世（よ）いひ傳ふ然るに一婢（へい）あやまちて一枚を破りしかハ全家みなおとろき悲しむを裏に米を春男（ウスツク）これを聞つけてわか家に秘薬ありて破たる陶器（スコモ）を繼ぐに跡も見えず先其皿を見せ給へといふ皆色を直して其男を呼てみせしに二十枚をかさねてつくづくみるふりしてもちたる杵にて微塵（クタキ）に碎たり人（ひと）これへいかにとあきれたれバ笑ひていふ一枚破たるも二十枚破たるも同しく一命をめざるゝなれハ皆わが破たりと主人に仰られよ此皿陶物なれハ一（キネ）破るゝ期有へし然らハ二十人の命にかかるを我一人の命をもつつくのふべし繼べき秘薬有といひしハ偽にてかくせんがため也と一寸もたじろかず主人の帰りをまちたるに主人帰りて此子細を聞き其義勇を甚感し城主へまうして士に取たれたりしがはたして廉吏成しとかや

場所や、二十枚の皿という設定は異なるものの、その他のプロットは、ほぼこれを利用している。

源七が遁世する場面や、結末の父子再会の場面は『刈萱後伝玉櫛笛』（中本型読本）を踏まえたものと思われる。

文化四年には『刈萱後伝玉櫛笛』（中本型読本）を刊行して居り、他作でも刈萱伝承を頻繁に利用している。それだけ関心の深いモチーフであつたと思われる。

さらに、広岡兵衛が深夜、山神廟に出没する異形のものを退治する段は、浅井了意『伽婢子』（寛文六）卷十一の一「隱里」に似た話があり、あるいは参照していたかもしれない。

結末で、寂靈和尚の済度により、紅皿の怨魂の仮に現じていた姿が消えてしまう段は、後編執筆直前の文化二年十二月刊行された京伝の読本『桜姫全伝曙草紙』の一駒を想起させる。なお、この「寂靈和尚」と「永沢寺」建立の話、「誕生寺の椋」「宇那堤森」「塙垂山」等は、以下の通り『和漢三才図会』に見えている。（句点を補つた）

丹羽

永澤寺

後小松院勅願 開山 道幻寂靈和尚

○禪師名寂靈號通幻洛陽人。禱清水寺觀音有レ姪將産母遽亡。瘞于古廟之側。行人往來輒聞廟ノ側有兒聲。父亦聞之開墳視之已誕生矣。父且喜且愕。懷歸祖母育之。甫二二歳父喪。歲十一。入台山。性英敏。凡内外經史。其目無レ不。通曉。十四剃髮慕禪門。乃能登。總持寺。參。峩山碩和尚。後和尚以古人公案節角諸訛處。一一詰問。師應答如流。逮和尚滅後。檀越細川氏欽。師玄化創寺。曰永澤寺。以師爲開山。每往來。總持寺。越前守乃於中路立。龍泉寺。爲師駐錫之所。應安年中。勅爲天下僧錄。明德二年五月五日寂年七十。

美作

誕生寺 在久米郡稻岡庄柄社村

崇德帝之朝長承二年四月七日源空誕生。其舍之西有椋樹。二杈大木也。白幡二旒降隣。其梢枝。有異香。俗呼。其木曰誕生椋。以爲念珠。後其地建寺號誕生寺。源空四十三歳在洛東大谷。吉水自作三尺影像。熊谷入道蓮生持下。安。當寺。恩院之下。寺領五十石

久米更山 在二宮村近處。有小川名久米川

久米更山 何花 美作や久米の更山さら／＼に我名ハ立し万代迄に 源

宇那提森

在久米更山近處

思はぬを思ふといはゝ真鳥すむうなての森の神もはつかし

勝間田御湯

此山の道の限と思へともかつまたのみゆ遠く成けり  
鹽垂山 在津山。坤。小山也

和漢の鹿の怪異については、『統搜神記』卷九「鹿女脯」

かるかやどうしんくしのいえづと  
かるかやどんなんくしげ

おとぎばう  
おとぎばう

かるかやどうしんくしのいえづと  
かるかやどんなんくしげ

淮南陳氏、於田中種豆、忽見二女子、姿色甚美、著紫纈襦、青裙、天雨而衣不湿、其壁先掛一銅鏡、鏡中見二鹿、遂以刀斷獲之、以為脯。

また『前太平記』卷第一「経基射鹿給事」

……大きなる牡鹿、築山の陰より躍り出で、散り敷く紅葉に戯れしは、猿丸太夫の詠じけん、歌の余情も斯くやらん、小倉山の風景を、今茲に移し出だせる眺望かと、御遊の興を添へられしが、始めの程とそれ、珍しくも面白き事に思い給ひしが、次第に何となく恐ろしく、又何くより來たるべき道もなきに、けしからぬ様して駆け出でたれば、主上は幼き御心に、絵に描けるより外は、終に御覽ぜられし事も無ければ、「あな恐ろし。如何なるものぞ」とて、をびへさせ給へば、「人や候あれ追ひ出だして進らせよ」と声々に呼ばゝり給へども、所は后町の北なれば、外衛の諸士は一人も候はず。鹿は猛つて駆け騰がり、まぢかく玉体に飛び懸かり進らせんとす。若殿上人達周章騒ひで、我も／＼と太刀を抜きて、切り払ひ／＼給へば、剣にや畏れけん、南の庇に飛び揚がり、常寧殿の棟に皇居を脱んで居たりける。

夫鳳闕の十二門、皆交戟衛伍を守り、長に非常を誠むるとなれば、天をも翔るか地をも潛らば、争でか爰に入ることを得ん。古今未曾有の珍事なりと、諸卿驚き合はれしに、摂政忠平公宣ひけるは、「目に見へぬ物の障礙せば奇しとも謂ふべきか。鹿は足有れば、何處にか至りぬべし。恵しとするに足らず。射芸に達したらん者に仰せて射させ候はん。誰か候」と召されしに、経基王御在しければ、つつと参り給ふ。摂政、「云々のことあり。射留どめ申されんや」と仰せられければ、一議にも及ばず領掌ありて、則ち弓と矢執り寄せて件の所に至り、彼の鹿の有り様を伺ひ見給ふに、何様にも尋常ならず、上下の牙生い違ふて、口は耳の根まで裂け、水晶の面に血を洒ぎたる如き眼にて、四方を見廻し、隙あらば御殿の中に飛び入りぬべき氣色なり。「さればこそ曲者なれ。若し我が形を見はバ逃げもやせん。射損じたらんに於いては、当坐の恥辱のみにあらず、末代までの瑕璫なり」と、貞觀殿の御階の下に居隠れて、弦くひ湿し、流鏑矢打ち番ひ、彼鹿の有所能々見澄まして、暫く堅めてひやうと発つ。其矢少しも矢坪を違へず、左の草分より右の耳の根まで、鎌白く射出だしたれば、争でか暫しも休ふべき、真倒さまに転び落つ。摂政殿下を始めとし、三公九卿諸家の武士、内侍命婦の官女まで、「あゝ射たり／＼」と云ふ声に、御殿も搖るぐ計りなり。其後件の鹿を、淀の川瀬に柴漬にぞしたりける。則ち斎部ト部の両家に仰せて、様々の御祓有りて、濁穢を清め給ひける。……

などを参照したものと思われる。

また、鸚鵡が奸夫淫婦の悪事を主人に知らせるという趣向は、後年になつて合巻『鳥籠山鸚鵡助劍』（文化九）でも使用している。この話柄は和刻本『開元天寶遺事』（寛永十六）に見えている。

### 鸚鵡告事

長安城中ニ有ニ豪民楊崇義ト云一家富ニ數世ナリ眼玩ノ之屬僭ス於王公ニ崇義妻劉氏有ニ國色一與ニ隣舍ノ児李弇私通シテ情甚シ於夫ヨリモ遂ニ有レ意レ欲害ニ崇義ヲ忽一日醉テ坂寢ニ於室中ニ劉氏與李

弇同<sup>ク</sup>謀<sup>ア</sup>而害<sup>レ</sup>之埋<sup>下</sup>於枯井<sup>ノ</sup>中<sup>上</sup>其<sup>ノ</sup>時僕妾<sup>ヲ</sup>輩并<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>覺惟有<sup>リ</sup>鸚鵡<sup>一雙</sup>在<sup>ニ</sup>堂前<sup>ノ</sup>架<sup>サトル</sup>  
 上<sup>ニ</sup>泊<sup>レ</sup>殺<sup>ニ</sup>崇義<sup>一</sup>之後其妻却<sup>テ</sup>令<sup>レ</sup>童僕<sup>ヲ</sup>四散<sup>シテ</sup>尋覓<sup>シテ</sup>其<sup>ノ</sup>夫<sup>ヲ</sup>遂<sup>ニ</sup>往<sup>レ</sup>府陳詞<sup>シテ</sup>言<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>夫不<sup>レ</sup>  
 坂<sup>ヒソカニヲ</sup>竊<sup>ミルハ</sup>慮<sup>ニ</sup>爲<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>害府縣<sup>ノ</sup>官吏日夜<sup>ニ</sup>トラバストス捕<sup>レ</sup>賊<sup>ヲ</sup>涉<sup>ル</sup>疑<sup>ニ</sup>之人及<sup>ヒ</sup>童僕<sup>ノ</sup>輩經<sup>ル</sup>搘捶<sup>ヲ</sup>百  
 數人莫<sup>レ</sup>究<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>弊<sup>ヲ</sup>後來縣官等再<sup>ヒ</sup>詣<sup>シテ</sup>崇義<sup>カ</sup>家<sup>ニ</sup>換<sup>シテ</sup>校<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>架上<sup>ヲ</sup>鸚鵡忽然<sup>トシテ</sup>聲出<sup>ツ</sup>縣官遂<sup>ニ</sup>  
 取<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>臂<sup>ノ</sup>上<sup>ニ</sup>因<sup>テ</sup>問<sup>フ</sup>其<sup>ノ</sup>故<sup>ヲ</sup>鸚鵡<sup>ノ</sup>曰<sup>シ</sup>殺<sup>バ</sup>家主<sup>ヲ</sup>者劉氏李弇<sup>シト</sup>也官吏等遂<sup>ニ</sup>執<sup>ト</sup>縛<sup>ト</sup>劉氏<sup>ヲ</sup>及<sup>ヒ</sup>捕<sup>レ</sup>  
 李弇<sup>ヲ</sup>下<sup>レ</sup>獄<sup>ニ</sup>獄備<sup>ニ</sup>招<sup>レ</sup>情欵<sup>ヲ</sup>府<sup>ノ</sup>尹具<sup>ニシテ</sup>事案<sup>シテ</sup>奏聞<sup>ス</sup>明皇歎<sup>シ</sup>訝<sup>ル</sup>久<sup>シ</sup>之其<sup>ノ</sup>劉氏李弇依<sup>テ</sup>刑<sup>ニ</sup>  
 處<sup>ス</sup>死<sup>ニ</sup>封<sup>テ</sup>鸚鵡<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>綠衣<sup>ヲ</sup>使者<sup>一</sup>付<sup>シテ</sup>後宮<sup>ニ</sup>養<sup>ヒ</sup>カハシム餌張<sup>シテ</sup>後<sup>ニ</sup>爲<sup>ル</sup>綠衣侍者<sup>ノ</sup>傳<sup>好ム</sup>事者<sup>ノ</sup>傳<sup>之</sup>

この他にも様々な出典があると思われるが、中本型読本としては比較的良くまとまつたテキストである。本作に用いられた趣向は後に、文化十一年刊の合巻『皿屋敷浮名染着』や、文化十二年刊の読本『皿々郷談』でも利用されているのである。蛇足ながら、缺皿が皿を割る説明に「名詮自称」という語が用いられて居り、比較的早い用例として注意が惹かれる。

なお、前編見返しに記された「鵠飛山月曉 蟬噪野風秋」の二句は、『全唐詩話』(四〇巻一冊)に見える「上官儀『入朝洛堤歩月』」脈脈廣川流 軀馬歷長洲 鵠飛山月曉 蟬噪野風秋」(『朝に入らんとして洛堤月歩む』)脈脈として廣川流れ 馬を驅りて長洲を歷 鵠は飛ぶ山月曉 蟬は噪ぐ野風の秋)に拠る。『大唐新語』文章第十八には、「高宗貞觀の後を承け、天下事無く、上官儀独り宰相と為る。嘗て凌晨入朝し、洛水の堤に循ひて歩み轡を徐ろにし、詩を詠じて曰はく、脈脈として廣川流る 馬を驅りて長洲を歷 鵠飛びて山月曙け 蟬噪ぎて野風秋なり 群公之を望むこと神仙の如し焉。」とある。この句は馬琴が気に入っていたと見え、『南総里見八犬伝』肇輯の自序に「八犬士傳序」「蟬(噪野)」と、蟬の絵中に第三句を意匠化して使用している。

### 〈書誌〉

前編	二卷二冊(底本は合一冊)	十八・九糪×十三・四糪
表紙	貴重色無地	
題簽	左肩 枯葉色地墨刷の破片のみで外題は不明	
見返し	白地墨刷 四周双边	月下岩山の意匠 中央に「盆石皿山記」、右肩に「曲亭馬琴作/
序題	「柳齊豊広画」、左下に「前編一冊/鳳來堂梓」	右に「盆石皿山記」、右肩に「盆石皿山記自叙」(「文化ひのえ貢のとし正月」)
目録題	なし	(丁付はノド)
内題	「盆石皿山記前編上(下)」	
柱刻	なし	
尾題	「盆石皿山記前編上(下)」	果
匡郭	十六・二糪×十・九糪	
丁付	上巻	自叙二丁(序一オノ序二ウ) 目録半丁(序三オ) 口絵半丁(序三ウ)
	本文二十五丁(上一オノ下二十五終ウ)	計二十八丁

下巻 本文二十一丁（下一才〇下二十一ウ） 跋二丁（跋一才〇跋二天尾ウ）

刊記 半丁（後ろ表紙見返し） 計二十三丁

行数 叙八行 本文九行 跋八行

刊記 文化二年乙丑夏五月著述

同三年丙寅春正月発行

江戸四谷伝馬町二丁目

住吉屋政五郎梓

印記 なし

その他 国会本には、上巻六丁と七丁の間に封じ紙が残つてるので初板初摺本と見做して良い。

後編 二巻二冊（底本は合一冊） 十九纏×十三・三纏

表紙 浅標色無地に紗綾形龍紋の型押し（改装されているかもしない）

題簽 左肩（原題簽なし、大惣の書題簽あり）

見返し 白地鶴茶刷 朝顔をあしらつた飾枠。中央に「盆石皿山記後編」、右側に「曲亭馬琴戯

作 今刊二冊、左側に「一柳斎豊広画 鳳来堂梓」

序題 「刊皿山記後編叙」文化柔兆撰提格麦秋上浣「飯岱 曲亭馬琴重叙」「馬琴」「」

目録題 なし

「盆石皿山記後編上（下）」

内題 「皿山後編上（下） 丁付

柱題 「盆石皿山記後編上果」 「盆石皿山記後編大尾」

尾題 「十五・九纏×十一・一纏

丁付 「上巻 叙一丁半（一才〇二ウ） 目録（二ウ） 口絵二丁半（三才〇五才）

（再識）半丁（五ウ） 本文（六才〇三十一ウ） 計三十一丁

下巻 本文三十一丁（一才〇三十一ウ） 跋一丁半（三才〇三才〇三十三才）

刊記 半丁（三才三ウ） 計二十三丁

行数 叙七行 本文九行 跋八行

刊記 文化三丙寅年臯月上浣著述

同四丁卯年春正月吉日発販

江戸書肆 通油町

鶴屋喜右衛門

印記 上巻は一才〇三十一ウ、下巻は一才〇三十三ウに大惣の印記あり。

その他 架蔵本は表紙欠の汚本故、この書誌は国会本に拠る。国会本上巻七丁と八丁の間に封じ紙を破去した跡が見られる。

諸本 半紙本仕立の後摺本が二種類ある。一方は四冊で、分冊方法は中本仕立のものと同じであるが、後編七ウ八才の挿絵（佐用丸を包んだ鹿皮が飛ぶ図）以外の薄墨は省かれてい

る。他方は八冊に分冊したもので、内題を「絵本皿山奇談」とし「大坂書肆 心斎橋／北久宝寺町 相原屋義兵衛」という刊記を持つ。薄墨は全て省略されている。更に後、明治期に三木佐助が求板後摺したものもある。

〈凡例〉

PDF版は可能な限り板本の表記に近付けた。

HTML版では検索の便を考慮し、異体字等は近似の字

体に置き換えた。

二、片仮名は、助詞の「ハ」を除いて、特に片仮名の意識をもつて書かれていると思われるもの以外は平仮名に直した。

三、表記上の誤りと思われる箇所は訂正せず「ママ」と傍記した。但し、脱字と思われるものは私意に拠り「」内に補い、衍字と思われるものも「」に入れて示した。

四、「各丁に」印を付し、その裏に<sup>1</sup>のごとく丁付を示した。

五、見返し・口絵・挿絵は全て図版を掲載した。

六、底本として、前編は国立国会図書館所蔵の早印本（二〇八一—一六一）に拠り、後編は比較的早い印だと思われる架蔵本を使用した。だが、架蔵本は表紙欠で落書きの多い汚本故、図版は国会図書館本を使用させていただいた。記して深く感謝致します。

盆石皿山記前篇  
【表紙】



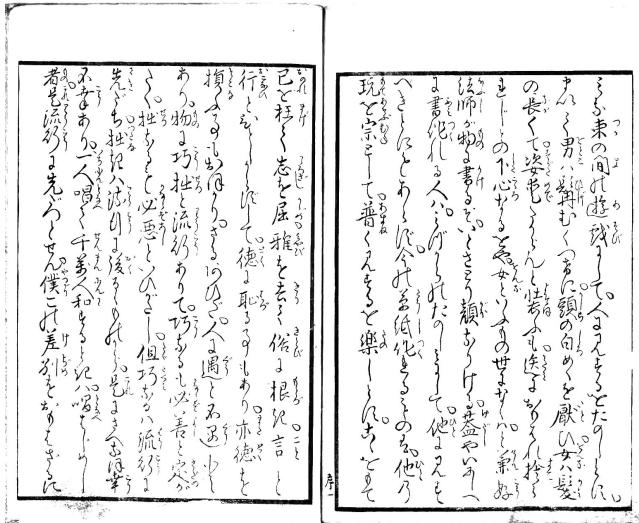
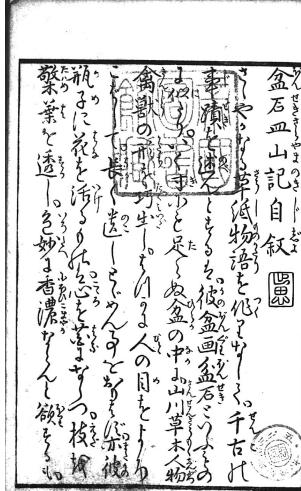
【見返し】

曲亭馬琴作  
一柳齋豊廣畫

盆石皿山記

鶴飛山月曉  
蝉噪野風秋

前篇二冊  
鳳來堂梓



【自叙】

盆石皿山記自叙

出思

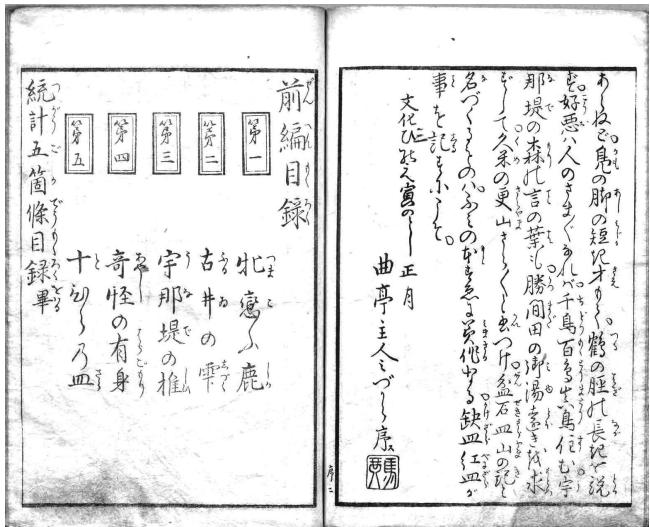
さゝやかなる草紙物語を作りなしして、千古の事蹟を述んとするは、彼盆画盆石といふものに似たり。いく寸にも足らぬ盆の中に、山川草木人物禽獸の形を巧出し。はつかに人の目をよろこばして、長く遺しとゞめん事をおもはず、亦彼瓶子に花を活るものは、心を華になしつ。枝を繁葉を透し。色妙に香濃ならんと欲するも、みな束の間の遊戯にして、人に見するをたのしとす。まいて男ハ鬚むくつけに、頭の白めくを厭ひ。女ハ髪の長くて、姿愛たからんと裝ふも、迭におとり顔なりける。蓋やいにしへに書作れる人ハ、みづからたのしみにして、他に見すべきとにもあらず。今の草紙作れるものは、他の玩を宗として、普く見するを樂しとす。こゝをもて「序」已を柱て、志を屈。雅を去て俗に根き。言と行とひとしからずして、徳に耻る事もあり。亦徳を損

ふ事もおほかりり。さるあひだ。人に遇と不遇とあり。物に巧拙と流行ありて。巧なるも必善と定めがたく。拙なるも必悪といひがたし。但巧なるハ流行に先だち。拙きハ流行に後るゝものから。是にさへなほ幸不幸あり。一人唱て千萬人和するときハ。唱はじめし者。是流行に先だつとせん。僕この差別をおもはざるに」あらねど。鳬の脚の短き才もて。鶴の脛の長きを説ず。好惡ハ人のさまぐなれバ。千鳥百鳥真鳥住む。宇那堤の森の言の葉も。勝間田の御湯遠きを求ずして。久米の更山さらゝと書つけ。盆石皿山の記と名づくるものハ。ふみの本するに美作なる。缺皿紅皿が事を記すにこそ。

## 文化ひのえ寅のとし正月

序二

曲亭主人みづから序ス



前編目録

第一 牝戀ふ鹿  
第二 古井の雪  
第三 宇那堤の椎  
第四 奇怪の有身  
第五 十ひらの皿

統計五箇條目録畢

第一 牝戀ふ鹿  
第二 古井の雪  
第三 宇那堤の椎  
第四 奇怪の有身  
第五 十ひらの皿

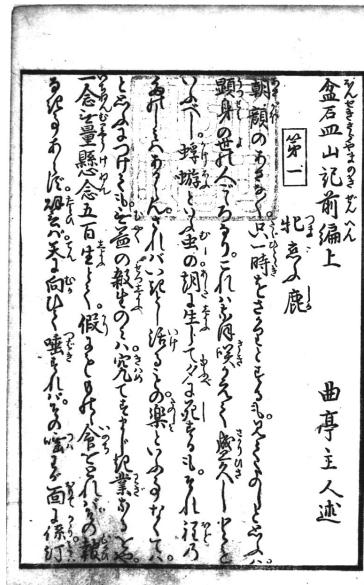


客皿の十人前や白牡丹

蓑笠隱居

琴馬

缺皿



## 盆石皿山記前編上

曲亭主人述

朝顔のあさなく。只一時をさかりとするも。見てたのしと思ふハ。顕身の世の人ごゝろなり。これハなほ咲かえて盛久しともいふべし。蜉蝣といふ虫の。朝に生じて夕に死するも。それ程のたのしみはあるらん。さればいきとし活るもの。樂といふ事なくてハ。と思ふにつけても。無益の殺生のみハ。究てすまじき業なるをや。一念無量懸念五百生とて。假にもものゝ命をとれバ。その報なき事あらず。譬バ。天に向ひて睡すれバ。その睡わが面に係。汀に立て水を打バ。その水わが衣を湿す。心なきものすら。すべてかくのごとし。况生あるものに對し。善惡の報なき事を得ず。こゝに美作國久米の更山の片ほとりに。木村源七といふものありけり。原ハ雲州富田の城主鹽治駿河守師高の家臣

也。主君師高ハ。去ぬる應永元年。山名満幸が謀反に与し。戦敗れて終に自殺し給ひけれバ。源七も敵陣に走り入り。討死せばやと覚期せしが。ふたゝび思ひめぐらせバ。目ざすにあまる大軍に。われ只一騎駆むかひ。よしや敵一人一人を討とりて死するとも。九牛が一毛にて。主君の仇を報ふにもあらず。こゝ<sup>上1</sup>にて大死せんよりハ。命全うして亡君の後世をも吊進らせ。世の形勢をも見つべしと深念し。わが姉の子に。三重之介とて。今慈七才なるが。近曾孤となりけれバ。家に養ひおきたりしを伴ひ扶て。やうやく一方の園を切ぬけ。些のしるべあれバ。美作國をこゝろざして落行折しも。乱軍の中に甥の三重之介を見うしなひしかバ。世ハはやかうと浅ましく。死おくれたる身を悔み。夢路をたどる心持して。われのみいなば美作や。久米の更山にぞ着にける。しかるにこの山の麓なる。獨人長助といふものハ。源七が乳母の夫にて。由縁あるものなれバ。これを「便りてその家に尋ゆき。主家の滅亡。わが身。甥の三重之介が事まで。備細に物がたれバ。乳母ハさらなり。長助も信あるものなれバ。ふかく憐み。いつまでもこなたにおはせとて。世にたのもしく款待にぞ。源七もその志の淺からざるを感悦し。且く足を駐しほどに。なす事もなくて。貧き家に養るゝを心うく思ひ。一日長助とゝもに山にわけ入り。一ツの鹿を射てとりしに。いとおもしろき事におぼえしかば。これよりして只管殺生に心を委ね。其許八年老たり。われかはりて活業をせん。心安く思ひ給へなどいひこしらへ。其後ハわれのみ日毎に<sup>上2</sup>狩くらすに。弓ハ元來その家に生れて。百發百中の手煉あり。年紀ハ升五才にて。筋骨も健なれバ。年來その技に馴たる長助よりも。獲ハ却て多からける。さて又長助ハ。晚稻と名づけし女児只ひとりをもちて。今茲十八才也。かゝる田舎に生育といへども。容貌も醜からず。開らきかゝれるはつ花の。匂ひそめにし時なれバ。源七が男態の艶なるに。いつとなくこゝろありげなるを。父母はやく見てとりて。素姓といひ古主といひ。彼人を婿とせバ。千ミの黄金を得しよりも。女児が僥倖ならんとて。源七と晚稻がさし向ひ居るときハ。わざとその坐を外せしも。子ゆゑに甘き親ごゝろ。すいを通すと娯くて。晚稻ハ思ふ心のうち。わりなく口説より糸の。結べる縁にし夜をかさね。日をかさねつゝ妻とも。妻ともつかでその年も。程なく暮て立かへる。春も弥生のころなりけん。長助夫婦俄頃に病て。終にむなしくなりにけり。そのよは六十を超て。思ひ残す事ハなけれど。いつとも親子の別れ。かなしみ歎もことわりなるに。ましてや只一日のうちに。一親を喪ひし。晚稻が身の便なさ。ちからとするハ源七様。あなた一人と

かこつにぞ。源七も長助夫婦が。一旦の恩儀をおもひ。縊このまゝ朽果る」とも。見すつる所存さらなし。心づよくおはせよ。といひ慰めてなき人の跡懇に吊ひぬ。こゝに又更山の近在。二宮といふ村に。錦織郡司といふ老人あり。そのいにしへハ時めきて。何不足なき身上なりしが。いかなる過かありけん國守の御氣色を蒙り。所帶を過半没取せられしかば。残る田畠をも人に領て耕させ。わが身ハ久しく閑居して。物の卒を枕の友とし。哥を詠じて思ひを述。世を風流にくらせども。妻ハ先だつてなき人の員に入り。子といふものもなかりし程に。とかく老人の介抱ハ。女子にますものあらじとて。落穂といふ妾一人をもてりける。されど郡司ハ齡七十を超たれバ。あへて色を好にもあらず。只肩を打せ腰を捺らせ。さながら看病人に異ならず。この時落穂ハ。としもいまだ二十をすぎ。姿も又匂やかにて。こゝろ利たる女子なれど。不幸にしてはやく父母に後れしを。叔父の弁四郎といふもの。居多の給銀を貪りて。近曾妾奉行に出しけるとぞ。しかるに彼獨人長助ハ。郡司がむかし時めき栄し頃。久しく仕たる家隸にてありしかば。常に訪ひおとづれし程に。郡司もその老実なるを愛し。をり／＼衣服などとらせしが。長助世を去て後も。源七たえず出入りて。昔にかはらず敬ひ冊きけるを。落穂ハ見るたびに心ときめき。目元に思ひをかよはせても。源七元より物がたき男なれバ。馴しく詞もかけず。郡司も落穂が素態を猜しながら。わかきものゝ他心。たれも一たびハかくぞあらめ。老たるわれに仕れば。妾といふも名のみにて。彼が男はしげなるも憎からず。されど源七ハ究て心正しきものなれバとて。聊も疑はず。頃しも秋の半なるに。郡司が宅地ハ久米川を前に堰入れ。塩垂山宇那堤の



12

森も遠からで。庭いと廣けれバ。草の花いろ／＼に咲みだれ。楓も色つきて。野山の錦も外ならず。夜に入」  
「挿絵第一図」<sup>5</sup> 上  
「れバ 塩垂山の鹿。めづらしくかよひ来て。牝恋ふ声も妙也けり。あるじ  
ハかねて敷嶋の道に心をよすれバ。これをゆふべの友として。暮るゝを遅しと待わびしに。十日ばかり  
ののち。彼廉一夕來ることなし。こへいかにしつる。とその夜ハ本意なく明せしに。忽地源七訪ひ  
來しかバ。郡司この事をいひ出で。年來わが庭へ鹿の來て鳴こともなかりけるに。この秋ハめづらか  
に。軒端ちかく鳴を聞け。尋常の鹿にかはりて。声も又妙なるをもて。ふかくこゝろに愛せしが。夢野  
の鹿の夢にだも。疇昔のみその音を聞ず。いと不審こと也と語るに。源七横手を<sup>上</sup> 丁と拍。その物が  
たりにつきて。思ひあはすることこそあれ。昨夜こゝよりハ四五町あなたの野ずゑにて。一頭の牝鹿  
を射とめたり。その形體の大さありて。尾ハながく。毛いろ蒼くして玄を帶。これハ鹿の牝なるべ  
しといへバ。郡司大に驚きていふやう。格物論に。鹿ハ一千年にしてその毛蒼く。又百年にして白鹿  
となり。又五百年にして玄鹿となる。鹿ハその角一ツありて。尾ハ牛に似たりといへり。疇昔御身が  
射とりしハ。千餘年を経たる鹿なり。嘗古老人の物語に。塩垂山に牝牡二頭の鹿あり。神通を得てから  
ぐしく人の眼にかゝらずとおぼゆる也。さてくいとをしきことかな。と悔歎くにぞ。源七も打お  
どろきて。何となく毛髪いよだちぬ。郡司ハ只顧彼鹿を憐みて。是よりこゝち惱しく。元氣やうやく  
衰へて。既に危く見えければ。源七も日毎に來りて病を訪ふに。郡司おもき枕を揚。わが老病今ハた  
のみすくなくて。けふを限りと思ふなり。われ日來。御身が信あるをしるが故に。今般の一言を遣し  
て。たのむべき事あり。聞とづけ給はるべきや。といふに<sup>上</sup> 源七聞て。何がさて長助世にありし時  
より。ふかく庇を蒙り候へバ。かゝる折にこそ。御大事をも承「は」るべけれ。とくく仰候へかし。と  
申せしかば。郡司いとうれしげにて。たのみたきハ落穂が事也。彼ハ年わかけれど心も利。われに仕  
て信しけれバ。病といへども不自由ならず。快く往生する事。彼女子あるによれり。しかればわが  
身なからん後。その望をかなへてとらせんと思ふ也。その故ハ。落穂過つる頃より。御身を懸相して。  
思ひを運ぶ事久し。あはれ今より後。御身彼を妻とも妾とも見給ひてよ。しからばわが貯穂。悉く御  
身に進らすべしと。いふもいと苦しげ也。落穂ハ枕のほとりにありて。この事を聞も果<sup>6</sup> さず。顔う  
ちあからめて。次の間へ走り入りぬ。源七つらく件の遺言を聞いて肩を顰。仰を恃にハあらねど。そ

れがしにハ晩稻といふ妻もあり。殊さらこの世帯を屬て。彼女子を嫁らせ給はゞ。身元正しき壇がね  
ハいくらもあるべし。と辞退するを。郡司聞て。いやとよ。男女の情ハ貧福にもかゝはらず。只思ふ男  
に齋眉を。身の幸ひとするものぞ。彼がこゝろハ富る家の妻とならんより。御身が妻となり果ん事を  
ねがふとハ。われよくく見ぬいたり。かならず辞退し給ふなといふに。源七も當惑し。かくまで仰  
候へバ。まづ妻にもいひ聞せ。かさねて否やの返事いたし候はん。といひ訖りて家にかへり。晩稻に  
如」<sup>レ</sup>此如此の事あり。いかゞ思ひ給ふと問。晩稻ハ天性賢き女にて。いさゝかも嫉妬の心なく。し  
ばし沈吟していふやう。御身ハわが夫なれども。元は母の主君也。又郡司どのハ父の古主なり。恩義  
をもつていふときハ。何を輕しともしがたし。しかるに父が古主の遺言によりて。御身その遺迹を  
稟つぎ。郡司となりて里人に敬れ給はん事。歛びこれにます事あらじ。世にある人ハ。側室妾とて。  
かずくの女くるひするも男の生平也。はやく返事して郡司様の心をも安め。落穂どのゝ望もかな  
へ給へかし。と強にすゝめけるにぞ。源七もこの上ハとて。次の日郡司か許に至り晩稻が志の切  
をかたりて。承知のよしを返事すれバ。郡司大きに」よろこびて。誠に御身が女房ハ。世にも稀なる  
賢女也。落穂も彼婦が志にあやかりて。よく操をつくし。家内むつましくせよといひ訖り。程なく  
息ハ絶にける。

## 第二 古井の雪

木村源七ハ。思ひかけず錦織郡司が遺跡相續し。忌ども果て後。落穂を傍妻として。彼が叔父の弁四  
郎をも呼むかへ。内外の事をまかせしに。弁四郎ハ元來心よからぬものなれバ。この世帯ハみな  
わが姪の賜也と恩に被せ。主を主とも思はずして。只酒を飲よからぬ技のみしたりければ。落穂  
これをきのどくに思ひ。をり／＼<sup>レ</sup>異見してたしなめ懲しぬ。夫國に二人の王なく。家に一人の妻  
なしとへいへど。本妻晩稻が妬ごゝろあらざるによりて。妻と妾との間むつましく。さながら  
姉妹のごとくなれバ。源七もふかくよろこび。いづれに親み。いづれを疎といふ事なく。月と  
暮し花とあかせし程に。妻も妾もおなじ月より身ごもりて。おなじ日に安産せしが。生れし子ハ  
ふたりながら女にて。晩稻が生しハ。卒妻の子なれバとて。姉と定めて缺皿と名づけ。落穂が生るを  
バ妹として。紅皿と名づく。これハ久米のさら山によりての名なるべし。されバ月日に閑守なく。

缺皿紅皿「健」に生育て。その標致も劣らず勝らず。只智恵才学のみ。異かはりて。缺皿ハよろづの技に怡利て。記憶も人にすぐれ。紅皿ハすべての事に拙くて。手習縫刺ハざら也。落穂ハ久しく郡司にしたがひて。和哥の道さへ見なれ聞馴たれバ。一人の女兒に歌書。草紙物語などを讀するに。缺皿

ハ一を聞いて二三をしれど。紅皿ハとかく將あかず。かくて缺皿十三才なりけるころ。父の源七ハ。かねて好む殺生の。とにかく思ひとゞまりがたく。今ハ世わたる便にもあらねど。をり／＼山に入りて獸がりするに。一日亦例のごとく。只ひとり弓矢を携。彼此を狩くらせども。この日ハたえて獲もなく。むなしく家にかへらんとて。宇那堤の森を越來れバ。木立隙なきその中に。凡二圃も」上 10 あるらんとおぼしき松の木に。女の姿画を貼つけて。鉄箸よりもなほ太き。一尺あまりの釘を打たり。これハ世にいふ丑の時参りとて。人を兜ふ女子のわざにこそ。と思ひつゝ。何心なくこれを見れバ。妻の晚稻が姿画なれバ。こハいかにと興さめて。傍を見れバ。又あなたの松にハ。落穂か姿画を貼つけて。おなじやうなる釘を打おきしかバ。ます／＼驚き呆れて。



つくべ／＼と思ふやう。一卒の釘を引抜バ。釘の穴より二つの蛇。晚稻落穂が年來嫉妬の氣色もなくて。睦しく見えしかど。胸にたく火ハ消る間なく。互に咒咀ころさんとて。かく浅ましき技をしつるか。と思ふに打もおかれず。とかくして「挿絵第一図」上 11 忽然とあらはれ出。しばし啖あふ折こそあれ。風さつ吹來り。一枚の姿画を巻揚しが。蛇もゆくへなくなりて。釘と見えしハ麻の角なり。あら不審と思ふにも。ひとりわが身を顧れバ。主君師高生害の砌り。墨の衣に容をかえ。なき跡吊ひ進らすべきに。さハなくて。殺生をことゝし。

あまつさへしんつう  
剰 神通を得たる鹿をころしたる。

因果眼前報ひ来て。さしも睦しかりける妻と妾が。十年の月

つまてかけ

日を経て。互にころさんと祷る事。是たゞ事とハ思はれず。二人の女兒もふ便なれど。只恩愛の轟を  
断。これを菩提の種として。繁き迷ひを

〔ママ〕  
上 菖葦の。ふりにし蹟を追ふにハしかじ。と一すぢに思

ひ定め。山刀引ぬきて。髻ふつと切はらひ。いづくともなく立出けり。さる程に晩稻落穂ハ。次の

日に至りても。源七かへり來ざりけれバ。驚き怪て。追／＼人を出して彼此を索撃せとも。終にその  
ゆくへ  
往方しれず。家内の愁傷子どもが歎き。目もあてられぬ形勢なり。出でより百日といふその日にもな  
りしかば。世になき人と思ひ

誕生寺ハ。法然上人こゝにて生れ給ひし古蹟にて。今なは

たんしょくむく  
誕生棕とて。大なる棕の樹あり。この寺すなはち菩提所なれば。源七が墓を建。法事追善供のごとく

嘗みて」妻と妾ともろともに。彼寺に参詣し。花の水を手向んとて。墓原の古井に立より。晩稻まづ  
水を汲んとするに。この井桁朽損じて。索ハ十尋にあたり。中くらくして水も見えず。釣瓶も又重けれ  
ハ。手縄揚腕もたゆく。こへいかにせん／＼ともてあますを。落穂ハ見かねて。ともぐ／＼索へ手を

かけしが。何思ひけん釣瓶を丁と衝は  
なし。直に晩稻が裾をはらへハ。憐むべ  
し。晩稻ハ釣瓶に巻こまれ。千尋の井戸  
へ沈みけり。落穂ハ心に笑を含。わざと  
慌し風情にて。あれよ／＼と叫ぶ声に。  
所化たち走り来て大きに驚き。俄頃に  
棹を入れ鉢を下。やう上 やく引上げた  
りけるが。晩稻ハ落るとき。井筒にて頭  
を打碎水に没て程へたれバ。はや縛断  
てせんかたなし。落穂ハいよいよ泣声  
になりて。はやくわが家に告しらせ給  
はるべしといふに。所化たちこゝろえ  
て人を走らすれバ。弁四郎ハ缺皿紅皿  
を伴ひてはせ來り。葬の事などなし果



かけしが。何思ひけん釣瓶を丁と衝は  
なし。直に晩稻が裾をはらへハ。憐むべ  
し。晩稻ハ釣瓶に巻こまれ。千尋の井戸  
へ沈みけり。落穂ハ心に笑を含。わざと  
慌し風情にて。あれよ／＼と叫ぶ声に。  
所化たち走り来て大きに驚き。俄頃に  
棹を入れ鉢を下。やう上 やく引上げた  
りけるが。晩稻ハ落るとき。井筒にて頭  
を打碎水に没て程へたれバ。はや縛断  
てせんかたなし。落穂ハいよいよ泣声  
になりて。はやくわが家に告しらせ給  
はるべしといふに。所化たちこゝろえ  
て人を走らすれバ。弁四郎ハ缺皿紅皿  
を伴ひてはせ來り。葬の事などなし果

さんとす。されば缺皿ハわが身ひとつ悲しさに。母の死骸にとりつきて。共に死んと歎くにぞ。かくあるべきにあらねバ。みなさまぐにいひこしらへ。源七が墓よりハ。少し隔て晚稻を葬。七日くの法事など。よきに誄（あつらへ）おきて。四人もろともに家にかへりぬ。抑 晚稻落穂ハ」（挿絵第三図）

「上」年來始（とじろねだみ）こゝろもなかりしに。この時にあたりて。忽地虎狼の心を挾みしハ。いかなる天魔の所為にやあらむ。高祖崩（こうそ崩）じて人彘行れ。賴朝薨（りょうさん）じて良臣滅。妬婦の伎倆（たくみ）ぞおそろしき。かくて落穂ハ思ひのまゝに晚稻を欺きころし。おのれ女あるじとなりて。繼子缺皿を憎事。只是讎敵のごとくすといへども。缺皿元より伶利（さうり）て。聊もうらみず。落穂を実の母のごとく敬ひ親にも。なき父母の事一日も忘るゝ隙なく。人なき折ハつくと。身のはかなさもかこたれて挾き袂を絞りける。この時彼弁四郎ハ。憚るものなしと歎ひ。みづから落穂が後見と称し。只管酒を（まゝかゝざら）飲。よからぬ遊びに金錢を費して。程なく家も衰へ。奴婢もみな身の暇を乞て。おのがさまぐに出さりける。落穂もこれを氣疎くおぼえ。弁四郎にたびく（あらけん）呉見すれども。露ばかりも用ず。さればとて叔父の事なれば追出されもせず。せんかたなくて半年あまりの月日をおくりしに。思ひもよらず里人ども。源七を伴ひ來ていふやう。けふ塩垂山にて源七どのを見かけしゆゑ。無体に引とらへつれ來れり。この人今ハ世になきものとおもひしに。神かくしとて。天狗などの誘ひゆきしとおぼえたり。いざぐ（わなた）通与し進らするぞ。とみな口（くちく）にどよめけバ。落穂ハさら也。一人の女兒も夢かと（ゆめ）ばかりうれしくて。走り出で縋りつき。泣つ笑つ立さわげど。源七ハ物もいはず。只きよろくと見まはしたる。眼ざしも生平にかはり。五體垢づき鬚生出。ありし姿に吳なれバ。まづ心を鎮（しづめ）さするにハしかじとて。奥の間へつれ行。蒲團うち被せて寐かすとそのまゝ。たはひなく眠臥。明る朝やうやく人ごちつたりと見えて。みづから起出。さてわれハいかにして家にハかへりつらんと不審バ。みなくうれしくて。ありし事ども物かたる中にも。缺皿ハ母の晚稻が最期の形状。涙ともに語れども。源七ハあへて驚き悲もせず。何事も過さりし事ハ。只夢のごとくにて。わが身の事」上 16 さへしらずといふ。やがて湯に入れ髪ゆいければ。さのみ衰も見えずして 健なり。缺皿ハこの世にとも思はざりし。父がふたゝび帰りしかば。孝行日來にいやまして。人手もからず勦れバ。落穂ハわがむごくあたりしを。父に告ぐるかと推量して。いよく缺皿を憎こと甚し。しかれども源七ハ。そのこゝろ鈍くなり。二人の女兒を愛しもせず。只落穂が色に愛て。あけくれ睦み相語ふ程に。落穂忽地懷肝（おちほたまちまくわい）して。やうやく月もかさ

なりぬ。

### 第三 宇奈堤の椎

落穂ハ源七が。子ども等を愛せず。却てうるさき風情なれバ。」これを幸ひに。をり／＼缺皿をあしさまにいひなして。下女のごとくに責つかひ。さもなき事をはしたなく匂りて打擲すれば。紅皿も又これをよき事として姑を敬ず。少しの過をも母に告て折檻させ。よろづわがまゝに動止ける。頃しも九月の末なれバ。宇那堤の森にゆきて。椎実拾ひ來よとて。落穂ハ朝まだきより。缺皿をつかはしける。缺皿母の仰をうけて。既に立出んとせしに。秋の日のならひとて。一むら雨のはら／＼と降來るにぞ。ふるき竹笠を打かふり。ひとり彼森にゆきて椎実をひらひぬ。浩廻にはくはくと御覽じて。轎子を停させられ。彼女子を召呼ぶべしと仰あれば。近従の侍承り。缺皿を轎子ちかく伴ひ参る。時に赤松殿宣ふやう。われこのごろ當國を巡檢するに。領分の民百姓。老弱男女のわかちなく。群り集て行列を見物す。しかるに汝いまだ年をゆかざれば。なほ競ひても見るべきに。さハなくして見かへりもせず。只一心に椎をひらふ事。是いかなる故ぞやと尋給へバ。缺皿答て。わが母。この森にゆきて。椎を拾ひ得させよとハ申つれど。相公の行列を見たてまつれとハ聞え候はず。よりて私の壯觀に心をとめず。母の仰を重しとするが故に。かく御不審を蒙り候かと申けれバ。赤松殿大に感心あり。汝年紀ハいくつぞ。名ハ何といふと問給ふに。缺皿と呼れて十四才になり候と答ふ。赤松殿又宣ふやう。汝ハ稀なる孝女なり。今椎を拾ふを見るに。頼政が故事さへ思ひ出らる汝。彼頼政が椎の哥をしるや。いかにと宣へバ。缺皿莞尔として。むかし頼政朝臣三位の望ふかゝりしに。齡かたぶくまで四位にておはしけれバ

登るべきたよりなき身ハ木の木に椎を拾ひて世を渡かな上 18

と詠ぜしかば。七十五才にて三位に叙せられ給ふよし。盛衰記にハ見えたれど。玉海の説によれば。治承二年十二月廿四日。清盛入道淨海のすゝめによりて。頼政を三位に叙せらる。是第一の珍事也と記したり。盛衰記ハ。後に。葉室並相の書あつめ給へるものなれバ。作者筆を揮ひて。滑稽をつくせしと見ゆるところもあり。と聞及びて候。又前の哥。椎を四位にいひかけたれど。椎ハしひの假名。

四位はしるの假名にて。ひ。ゐ。の違あり。すべて頼政朝臣ハ。世に高き哥人にておはせしかバ。彼もその人の哥也。これも彼朝臣の詠也と。附會の詠をなす事」おほしとぞ。この事いかゞ候やらん。と憚る氣色もなく申上れバ。赤松殿ますく感じ給ひ。こハ珍らしき才女也。定て哥をも嗜なるべし何をや題にして。詠すべきと宣ひつゝ。傍を見かへり給へバ。森の中に古き地蔵堂ありて。何人の願立てせしにや。皿に塩をうづたかく盛りて。供おきしが。向の雨にうたれて。その塩半解たるを。近従に仰てとりよせ給ひ。又松の小枝を手折らせて。塩の上に挿み。いかに女子。これを題にして。哥つかふまつれと仰けれバ。缺皿。

美作や皿てふ山の雪とて塩垂峯にかよふ松風」上 19



と申けれバ。主従感吟大かたならず。嗚呼と賞して止ざりける。赤松殿只管その才に愛給ひ。汝今より給事せよ。直に伴ひゆくべしと宣へバ。缺皿うけ給はり。すべて女子ハ。親のゆるしなくて。身を人に倚せずとこそ申なれ。ねがはくハまづ父母に仰下されて。そのゝちに参り候はんと申にぞ。げに理と承引あり。よくく彼が住處を尋ねさせられて。津山のかたへ過給ふ。缺皿ハ此問答に隙どりぬれバ。かへり遅しとて。母の怒やし給はん。はやく家路おもむに趣くべしとひとり言し。拾ひあつめたる椎の袋を引かたげ。何ごゝろなく見あぐれバ。いくとせか經し椎の梢に。一口の刀」（挿絵第四図）」上 20

ありて。その下緒はづかに枝にかかりたれハ。かゝる所に。人のおきわするべきにもあらず。これハ近曾の山洪水に流れ来て。おのつからこゝに懸りつらんと思ひ量。やがてわが家へ立かへれハ。落穂見ると声をかけ。何とてかく

ハ遲かりし。走り使に假託て。道草くふがつらにくし。けふハはや宥し<sup>ゆるし</sup>がたしと罵りて。帝ふり上<sup>の</sup>げりう／＼と打居れバ。缺皿ハ逃もやらず。母様ゆるし給へ。かぎねてハはやく帰り候べしとぞ  
賠たりける。浩る折しも。赤松家の近臣<sup>あまつけ</sup>從者<sup>きんしん</sup>四五人を召つれて入り來り。この家のあるじ。源七が  
女児<sup>こじん</sup>缺皿事<sup>かみ</sup>。孝心才智<sup>こうしんさい</sup>すぐれしを。國守<sup>こくしゆ</sup>義則<sup>よしのり</sup>殿聞し召れ。紹事<sup>じょうじ</sup>上<sup>じょうじ</sup> 21  
料として。金子百兩<sup>きんすひやう</sup>を下し給ふなれハ。明日津山の御旅館へ召つれ出べしと述証<sup>じゆ</sup>れバ。落穂<sup>おちほ</sup>ハ呆  
れて回答<sup>いらへ</sup>もせず。走り入りてかくと告るに。源七<sup>はかま</sup>袴引<sup>はかま</sup>かけて出むかへ。町<sup>まち</sup>に挨拶<sup>あいさつ</sup>し。違背<sup>ふはい</sup>なく御請  
を申すにぞ。近臣<sup>きんしん</sup>ハ彼金子<sup>わたく</sup>を通与し。諸事の手都合<sup>てつがう</sup>などいひ聞てかへりぬ。されバ落穂<sup>おちほ</sup>ハ呆  
と思案<sup>し案</sup>して。叔父<sup>おじ</sup>の弁四郎を物蔭<sup>ものかげ</sup>に招き。御身も聞給ふ如く。けふ思ひもかけず。缺皿<sup>まね</sup>を國守<sup>こくしゆ</sup>へ召さ  
るゝ事<sup>こと</sup>。腹たゝしくも覺る也。わらハおもふに。赤松殿<sup>あかまつどの</sup>も。缺皿<sup>まね</sup>が事を。人傳に聞給ひしのみにて。い  
まだ見給ひし事<sup>こと</sup>ハあるべからず。」しかれハ今宵<sup>こよ</sup>缺皿<sup>まね</sup>を追ひうしなひ。わが女児紅皿<sup>くみ</sup>を。缺皿<sup>まね</sup>也と偽  
りて。國守<sup>こくしゆ</sup>の御許<sup>おんじゆ</sup>へまゐらすべし。よしや紅皿<sup>くみ</sup>ハ。姑<sup>あね</sup>ほどこゝろ利<sup>き</sup>すとも。親の慾目<sup>おや</sup>かしらねども。  
標致<sup>さきやう</sup>ハたちまさりて見ゆるに。なほ花やかに装ひ飾らば。相公<sup>おなか</sup>にも愛させ給はぬ事あらじ。御身<sup>こんや</sup>を  
かやう／＼に計ひ給へ。とさゝやけバ。弁四郎大に歎び。悪事<sup>あくじ</sup>ハ元より得物なり。缺皿<sup>まね</sup>をつれゆきて。  
室の遊女<sup>ゆうめい</sup>に賣遣らバ。身價<sup>みの</sup>ハ骨折貲<sup>ほねり</sup>。うまい／＼と心に點頭<sup>てんとう</sup>。一議<sup>いき</sup>にも及<sup>およ</sup>ず納得<sup>なつ</sup>して。日のくるゝを  
待つけつゝ。初夜過る頃<sup>ころ</sup>暗号<sup>あいご</sup>を定め。缺皿<sup>まね</sup>に手拭<sup>てぬき</sup>衡<sup>ひ</sup>せ。古き葛籠<sup>くのう</sup>に投入<sup>なげ</sup>れ。脊<sup>せなか</sup>に<sup>22</sup>上<sup>じょう</sup>楚<sup>しづか</sup>と老ぬれど。  
足腰<sup>あしのき</sup>たつしやな貪慾阿爺<sup>おやぢ</sup>。跡<sup>は</sup>をも見ずして走り出。宇那堤<sup>うな</sup>の森まで來りしに。ゆく先しれぬ宵闇<sup>よひゆみ</sup>に。  
尾花<sup>おばな</sup>戦<sup>ざょ</sup>ぐと見えけるが。思ひもかけず。一つの狼<sup>おほかみ</sup>。弁四郎が瘦駄<sup>やせすね</sup>へ。會<sup>あ</sup>積<sup>た</sup>もなく囁<sup>かみ</sup>つけバ。噫<sup>あつ</sup>と一声弁  
四郎<sup>よし</sup>にどつさり併<sup>たぶ</sup>るゝ時<sup>とき</sup>。古葛籠<sup>くのう</sup>の底<sup>そこ</sup>抜<sup>ぬけ</sup>て。缺皿<sup>まね</sup>撲<sup>ぱく</sup>地<sup>じ</sup>と轉<sup>まわ</sup>び出。この光景に驚き慌<sup>あわ</sup>き。口の手拭<sup>てぬき</sup>かな  
ぐり捨<sup>すて</sup>。肢體<sup>みうち</sup>わなゝ命<sup>いのち</sup>の際<sup>き</sup>。逃<sup>は</sup>るゝたけハ逃<sup>は</sup>れて見んと。木だれし枝<sup>えだ</sup>に手をかけて。椎<sup>しい</sup>の梢<sup>こずゑ</sup>に<sup>23</sup>登<sup>の</sup>り。  
り。こゝろの中に念佛<sup>ねんぶつ</sup>し。幹<sup>み</sup>をかゝへて居たりける。さる程に狼<sup>おほかみ</sup>ハ。弁四郎を飽<sup>あく</sup>まで啖<sup>くら</sup>ひ。缺皿<sup>まね</sup>が登<sup>の</sup>  
りたる。椎<sup>しい</sup>の梢<sup>こすゑ</sup>をうち瞻<sup>まつ</sup>り。尻<sup>しり</sup>声<sup>こゑ</sup>長く吼<sup>ほゆ</sup>るにぞ。御<sup>ご</sup>に響<sup>ひびき</sup>て物凄<sup>ものすご</sup>し。友よぶ音<sup>おと</sup>にやよりぬらん。いづ  
ちともなく居多の狼<sup>おほかみ</sup>。彼此よりあつまり來て。食残したる弁四郎が。死骸<sup>しがい</sup>を残らず啖<sup>くら</sup>竭<sup>ひき</sup>し。なほ飽<sup>あか</sup>  
りけん。互に生人氣<sup>ひとけい</sup>を顛<sup>ひる</sup>つけく。椎<sup>しい</sup>の圍<sup>まくら</sup>に居ならびて。落<sup>おち</sup>バ啖<sup>くは</sup>んと構<sup>かま</sup>たり。これを見る缺皿<sup>まね</sup>ハ。  
更に魂<sup>たましひ</sup>身に添<sup>そな</sup>ず。慄<sup>ふる</sup>るまゝに木も戦<sup>たたか</sup>へ。怖<sup>おぞ</sup>さ悲<sup>かな</sup>さやるせなし。いつまで瞻りつめるとも。はてしな  
しとや思ひけん。一頭の狼<sup>おほかみ</sup>。椎<sup>しい</sup>の根に身を倚<sup>よ</sup>せて。べつたり平めに匍匐<sup>はらは</sup>バ。又一頭<sup>いづ</sup>がその上へ。次第<sup>しだい</sup>

／＼に跋累り。その身を梯子に積上て。やうやく上<sup>23</sup> 梢にちかつけバ。缺皿ハ一枝づゝ。上へ／＼と  
縛登りしが。図らずも雇見たる。梢の刀に手がさはり。透し眺てふかく歎び。今しらずして刀ある。椎  
の木へ逃登りしハ。神佛の儕なるべし。ちかづかバかなはぬまでも。切はらはんと腰に服み。ふたゝ  
び上へ手を揚れバ。むんじやりさはるハ正しく獸。さてハ上にも狼あり。とても逃るゝ道なしと。  
なか／＼に胸をすえ。件の刀を引抜て。目當の枝を切て落せバ。どつさり物のおつる音して。居多の  
狼入乱れ。互に囁あひ挑あひ。吼る声いと囂く木をも抜べき勢ひなりしが。何とかしけん。紛々  
と。みな東西に逃うせて。松風のみぞ残りける。かくて夜もしら／＼と明ゆくころ。播州。佐用。山脇  
の郷士。廣岡兵衛といふもの。所用ありて備中の高瀬へ赴きしかへるさ。この所を通りかゝりしが。  
と見れバ椎の木のもとに。居多の狼食ころされ。あるひハ引裂れて死したるに。梢を見れバ十四  
五才の女子。枝に携。眼を閉。只茫然たる容なれバ。大に驚怪みつゝ。従者に下知して。女子を梢  
より扶御させ。さまざま／＼勤りてその故を問バ。缺皿やうやく人ごゝちつきて。ありし事ども物がた  
るにぞ。兵衛ふかく憐みて。寔に御身ハ命<sup>24</sup> 上めでたき女子ぞかし。思はずも刀の挂りし。椎の梢へ  
逃登しハ。是運命の竭ざるところ也。思ふに。木の股なる獸ハ熊なるべし。熊ハ夏より秋の間。木の上  
に栖ものにて。その木を熊棚といふ。彼熊御身に枝を切おとされ。一時の怒に乘じて居多の狼を引  
裂つるが。やがて御身の僕僕となりぬ。誘給へ。家に送りとゞけんといへハ。缺皿蒼て。かく庇を蒙  
りて。介抱にあひまゐらする事。身にあまりてよろこばし。さりながら悪人にもせよ。眼前。狼に  
大叔父弁四郎を啖殺され。わが身ひとり家にかへらんも面目なし。元是母に憎れて。家を追遣られた  
る事なれバ。只潔く自害して。母の心を安ること。子たるものゝ誠なれ。慙に身のよしあしを明  
すときハ。母の悪事を明すにひとし。南無阿弥陀佛といひもあへず。刀を咽喉へ衝たてんとするを。  
兵衛手ばやく押とゞめ。飽まで強顏繼母に。孝心をたて融し。身をころさんと思ひつめしハ。類すべ  
なき孝女也。今の命を吾に預。身の落着をも慮らバ。われ又あしくハ計はじ。とさまざま／＼にいひこ  
しらへ。昇せ來りし行橋に。缺皿を扶乗せ。終に播州に伴ひかへり。まづ下女のごとくにして召仕し  
かバ。缺皿も又再生の恩を感じ。心を竭して奉公せり。

## 第四 あやしの有身

さても落穂ハ。夜明て後。弁四郎が宇那堤の森にて。狼にや啖れけん。首のみありしとて。里人がもて来て備由を告しかば。うち驚きつゝも。缺皿ももろともに。啖れつらんと推量し。弁四郎が首をばてら寺に送りて埋させ。源七にしかゞゝの物がたりしていふやう。弁四郎どの。日來の悪事したらずして。缺皿を盜出し。君傾城に賣代なさんとや思ひけん。疇昔伴ひ出たるを。わらはも眠りてしらざりしが。目今叔父御も缺皿も。宇那堤の森にて。狼に啖殺されし。と告るものあり。さて痛し」きハ缺皿也。そもそも何とせんと泣声になりてかき口説バ。源七あへて驚きもせず。さればとて死したるものが。又生べきにもあらず。といひて悲む氣色もあらざれば。了得の落穂も呆れ果。頬うち瞻つゝ口を閉たるが且くしていふやう。けふ國守より缺皿を迎に來し給ふとも。その人なければいひわけせんもむづかしかるべし。わらはが思ふハ。紅皿を缺皿にして送りやらバ。事故なくおさまることもありなん。この事いかゞ思ひ給ふと問。源七點頭て。かゝる事ハわれに問までもなし。とかく御身がこゝろまかせに計ひ給へと答けるにぞ。落穂歓びて俄頃に衣服などとゝのへ。紅皿を摺磨て。花やかに打扮せ。迎遲しとまつ程に。一挺の轎子を下<sub>1</sub>扛らせ。若黨四五人さし副て。國守の仰として。缺皿の迎ひに來れり。とく／＼と案内すれば。落穂出むかへて。さまゞゝ饗應し。やがて紅皿を引あはすれハ。若黨これを缺皿也とこゝろえ。轎子へかきのせて津山の旅館へ立かへり。缺皿參りぬと申せバ。赤松殿早速召出して見給ふに。その容止少しは肖たるやうなれど。きのふ見給ひつる缺皿にハあらず。こハこゝろえずとおぼして。嚴く縁由を問せ給ふに。紅皿大に迷惑し。且くハ陣じけるが。問つめられてせんかたなく。母の落穂が悪心にて。缺皿を追ひうしなひ。わらはを缺皿也といつはりて進まゐ。義則大に怒り給ひ。源七ハわが領分にありながら。われを侮りて「詭を」行ふこそ安からぬ。いそぎ召捕來たるべし。と以の外に憤給へハ。逸雄の若侍。承るといひも果ず。身拵して走り行。源七落穂を追とり巻。國守赤松殿の御誕なり。誘参り候へと呼りて。引立んとする所を。源七はやく身をかはし。前にすゝみし一人の捕手に。もんどう

り打せて投退れバ。こハ朽をしと居多の侍。われ組とめんと聞くを。ほとりへも寄つけず或は蹴た  
ふし突仆す。電光石火の早技に。とり逃しなバかひなしと。手にくゝ刀を抜はなし。透間もなく切  
てかゝれバ。落穂ハ慌て途をうしなひ。逃廻る膳へ。刀尖翦て切こまれ。うんと倒るゝ深手の鮮血。  
源七が膝へ薦ると見えしが。あやしいかなその形状。忽地一角の巖<sup>2</sup>と変じ。掾より庭を飛越て。  
往方もしらずなりにけり。大勢の捕手これを見て。且驚き且怪み。茫然としてありけるが。これた  
ゞ事にあらずとて。まづ落穂を引起して。その痍口<sup>3</sup>をあらためば。懷肝して既に月をかさねし  
とおぼしく。胎内の子。半生れ出けるが。その形人間にハあらずして。毛いろ蒼き鹿なれば。ます  
／＼怪み。片息なる落穂を戸板へ乗せ。津山へつかへりて。かくと告まふらすれハ。義則甚不審  
給ひ。幸ひ落穂いまた死なであれバとて。縁故を糺明させ給ふに。はじめハ身を」（挿絵第五図）<sup>4</sup>」  
恥て。とかくいひかねけるを。いはすハ  
紅皿をも殺すべしとあるにゼひなく。  
夫源七が。塩垂山に年經る牝を射たり  
し事。そのゝち源七家出して又立かへ  
りし事。わが身の悪心にて。奉妻晚稻  
を欺き殺し。又叔父の弁四郎を相語て。  
缺皿を追うしなはんとせし途中にて。  
弁四郎も缺皿も。狼に啖れしなるべ  
しと思ふ事。苦しき息の下に白状す。  
義則聞し食て。しかれバその牡鹿。仇を  
報ん爲。おのれ源七と化て。彼が妻を耻  
しめ。すべて一族に災せんと計りし  
ならん。是併<sup>5</sup>。落穂が悪心の天罰にて。  
畜生の子を孕て死耻をさらす事。



因果観画の道理也。世の見懲らしに。胎内<sup>4</sup>の子ハ刺ころし。落穂とゝもに大路に曝すべしと仰  
ありて。形のごとく行<sup>は</sup>れしに。落穂ハます／＼苦痛に堪<sup>たへ</sup>ず。その夜の中に。狂ひ死にぞ死したり

ける。義則又宣ひけるハ。紅皿事。その心母に劣らず。現在姉を冤て。ひとり富貴をおもへるハ。人倫の所爲にあらず。彼をバそのまま追ひ放つべしと仰付られて。次の日白昼に追ひ拂はる。紅皿ハこの日來わがまゝ氣隨に生育しに。母に後れ家をうしなひ。繁ぬ船によるべなく。涙の潮袖にみちて。往方定ず吟呻ける。親の因果が子に報ふ。世の常吉も宣なるかな。是ハさておき。廣岡兵衛ハ。缺皿を播磨へ伴ひかへりしより。既に三年の月日を経て。缺皿十六才の春をむかへ。いよ／＼信やかに奉公す。しかるに兵衛が住ひする。山脇の北のかた。奥長谷といふ深山に。山神廟あり。廟内頗廣けれども。とし／＼に荒はてゝ。月と雨のみもる軒の。かたぶくまでに上久しが。この廟へよな／＼異形のものあつまりて。拍子おもしろく踊遊ぶといふ事を。このころもつはら風聞せしかバ。兵衛傳へ聞て。わが住むほとりの山を。妖怪の栖とせんも卒意ならず。ひそかに退治せばやとおもひ。弓馬の技ハ達者也。勇氣も又人に勝れたれバ。家<sub>下</sub>内のものにもしらせずして。あるゆみやたばさみ一夕弓矢手挾て。只ひとり奥長谷に至り。彼廟に通夜して。妖怪の出るをまつに。夜も深くと更まさり。遠き寺／＼の鐘おとづれて。丑三<sub>下</sub>ころとおぼしきに。居多の松明をふりてらして來るものあり。これこそ變化<sub>へんげ</sub>ござんなれ。と身構せしが。估と思案して梁の上に攀登り。姿をかくしてこれをまた大将と見えて。一峠大きやかななる妖怪。上座に無手と押なほれバ。残るハ左右に列坐たり。時に變化<sub>へんげ</sub>の<sub>た</sub>大将のいふやう。むかし木村源七に。わが牝を射ころ<sub>下</sub>され。その無念骨髓に徹し。年來怨を報んとねらひしに。源七ハ勿論。妻も妾も操<sub>さ</sub>正しく。聊も過なけれハ。その隙を窺ふ事かなはざりしに。落穂<sub>おらほ</sub>が生し紅皿<sub>うみ</sub>ハ。その才智缺皿に及ず。生育まゝに世の人も。缺皿のみを誉るによつて。落穂<sub>おらほ</sub>こしく妬の心を生じたり。われこの虚に乘じ。神通をもつて源七に。妻と妾が互に咒咀殺の体を見せしかバ。彼忽地無常を觀じて妻子を棄たり。こゝに於ていよ／＼落穂が悪心を募らせ。卒妻晚稻をころさせて。缺皿に憂めを見せ。われ又源七と化て落穂に胎らせ。終に缺皿をも追ひうしなひて。その一家を殺し竭さんとした<sub>下</sub>。りしも。はからず國主の武徳によりて。わが姿を見あらはされ。刺源七紅皿をも殲しにし。かさなる怨を雪んとおもふ也。おの／＼いかゞこゝろえ給ふといへバ。みな声を揃へて。然るべしと答ふ。兵衛これを聞濟して。雁股の征矢拔出し。十二束二伏。忘るゝばかり

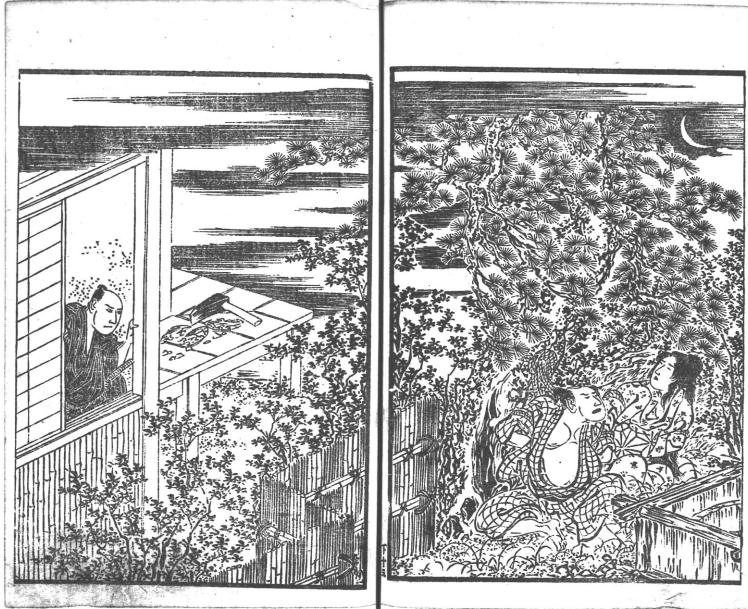
引しほり。件の大妖怪が脊の真中をねらひつゝ。矢声高く彈と放バ。燈火一度にはつと滅。變化ハ見えずなりにけり。兵衛やがて梁より下たち。用意の松明に火をうつして。廟の隅々を見れバ。鮮血少しだりて。獸の尻尾あり。そのさま牛の尾に似て毛色」蒼し。さてハ彼妖怪ハ。年經る蠶なるべきが。われに尾を射切られて逃亡しとおぼえたり。むかし唐山淮南の陣氏といふもの。田に出てふたりの女子にあふ。雨ふれどもその衣湿す。陣氏あやしみ。鏡を照してこれを見れバ。鹿なり。すなはち刀をもつて研らんとするに。形見えずなりぬとかや。又わが朝にハ源の經基王。内裡に猛きおほあはし。走り入り。天子を劫し奉りしを。忽地射て殺し給へり。しかれバ和漢に。鹿の妖怪ある事例なきにあらず。惜かな今の鹿。僅にその尾を射切て走せたる事よとひとり言し。天明のころ彼尾を携て家に立ちえり。妻の小舟にありし事ども「下物がたれバ。小舟驚きて夫の武勇を感じ。その恙なきを歎べり。この時缺皿ハ。次の間にて。主人の話をもれ聞。走り出ていふやう。只今宣ひしを聞くに。父母兄弟の身の果も。みな彼鹿の報ひならバ。父と妹を苦しめずと。わが身ひとりをとり殺し。怨はらしてくれよかし。と前後不覚に歎くにぞ。兵衛夫妻さまぐにいひこしらへ。汝が欺きざる事なれど。因果の脱がたきをいかにせん。殊さら父源七も。なほ世にありとおぼゆれバ。それを心の便にして。ふかく愁ることなけれ。かゝる事を人しらバ。父母の耻をますに似たり。あなかしこ彼鹿がいひし事。傍輩にも語るべ」からずといひ教れバ。缺皿もげにと思ひて。やうやく涙をとゞめる。そのゝち兵衛ハわが武勇を示さん為。彼鹿の尾を。刀の尻鞘に作り。常にこれを服て身を離ことなし。抑この廣岡兵衛が父ハ。元雲州の浪人にて。外戚の所縁に因。この山脇の郷士となりて。今二代に及べとも。赤松家に仕ふるにもあらず。されど兵衛が武勇。日を追て國中に名をしられ。國主義則然望のあまり。今茲四月のころより。度々召れし程に。兵衛はじめて出仕して。武藝の古實など申上しかば。赤松殿いよ／＼愛し給ひ。そのゝちをり／＼召れしに。ある時義則の坐下右に一連の数珠あり。兵衛不審てその故を尋申せバ。義則答て。この数珠ハ。美作國稻岡の庄。誕生寺の棕の木を伐りて作れるものにして。わが父律師則祐。常に襟に懸て出陣し。数度の武功をあらはし給へり。よりてこの数珠わが家にてハ。最秘藏の重器なりと語り給へバ。兵衛もかねて則祐の武勇を慕ひしかば。口にこそいはね。何となくほしげなるを。義則はやく猜して。尋常の器物ならバ。彼に与るとも惜に足らねど。この数珠のみハその望をかなへがたし。とこゝろの中に應答して。さらぬ体にて在しける。」

時既に六月炎暑の季候にもなりけるが。廣岡兵衛が家に。もち傳へたる皿十枚あり。是ハ異朝後周の柴世宗御批の青磁にて。

雨過青天雲破處

○コノヤウナル 這般顔色做将来

といふ二句を録したれバ。世に稀なる陶器なりとて。これを愛玩する事璧の<sup>ご</sup>とし。もし奴婢悞てこの皿を打碎くものあるときハ。その罪人を殺すにひとしく。忽地首を刎らるべし。と先祖より家の<sup>おさ</sup>撻<sup>おさ</sup>をたてたりける。かゝる秘藏<sup>ひざう</sup>下<sup>9</sup>の皿なれバ。生平にハとり出すこともなく。年に只一度土用の風に當るのみ。よりてこれをとり扱ふもの。こゝろ利たるにあらねバ委ねず。缺皿ハその性しづかなる女子にて。この任に堪たるもの也とて。今茲ハ彼皿の出納<sup>だいのう</sup>をまかせしかば。一日缺皿これを拭<sup>ぬぐ</sup>ひおさむる時。夏の日のならひにて。さしもの晴天見るうちにかき曇<sup>くもり</sup>ゆふ立きつと降出して。一声の雷。項の上へ落るばかりに鳴わたれバ。缺皿噫<sup>おぞ</sup>と怕れて。思はず手にもつ皿をとり落し。忽地微塵に打碎きぬ。こハ浅まし何とせんと慌忙<sup>あはてふため</sup>。その虧をひろひつゝ。繼<sup>つぎ</sup>あはせてもまとまらぬ。身のおさまりを案じやり。周章大かたならざれば。傍輩の下女會合來て。あら笑止や。御身このまゝあるときハ。終に命をとらるべし。はやく逃去り給へかし。とく／＼とせり立れど。缺皿ハといふもの。薪割<sup>まきわり</sup>を引提<sup>ひきあげ</sup>つゝこゝに來て。缺皿が傍<sup>ほ</sup>にどつかと坐し。われつら／＼思ふに。この皿のあらん限りハ。家に罪人絶べからず。一枚碎<sup>く</sup>て殺さるゝも。十枚碎<sup>く</sup>て命をとらるゝも。その罪ハひとつ也。われ今残る九枚をも」<sup>10</sup>打碎き。以後の愁を断べしといひもあへず。彼薪割をふり揚て。はつしと打バ件の皿。碎て四方へ飛散たり。こハ何事ぞと缺皿も。下女等も一齊驚きさはぎ。狂氣やしたる勇藏殿<sup>ゆうざうどの</sup>過してもいひ訛の。ならぬ撻<sup>おな</sup>としりながら。われから求めて碎きしハ。年わかい身を世に倦て。はやく死たい願ひかや。いとおぼつかなし短氣なり。とみな口<sup>く</sup>にさゞめけバ。勇藏少しも怕るゝ色なく。皿を残らず碎くからハ。殺さるゝハ覺期<sup>おも</sup>のまへ。わが一命を擲<sup>く</sup>て。後の罪人あらせじと語る事。家の為主人の為。又この家に奉行する。下男下女<sup>げなんげぢよ</sup>の爲なれバ。命ハさら／＼惜からず。と詞すゞしくいひ放す。浩處へ主人兵衛<sup>ひょう</sup>城中よりかへり來て。この光景に驚き怒<sup>いか</sup>をし。はなはな<sup>はな</sup>るといしゆゆひやうゑじやうぢやうぢやう。ほうこう<sup>ほうこう</sup>げなんげぢよ



卒心あかし給へといへば。勇藏莞然とうち笑て。われハ元雲州富田の城主。塩谷駿河守師高の家臣に。木村源七が下甥。同苗三重之介といひしものにて。師高滅亡の時ハ。僅七才なりしが。叔父源七に伴れ。富田の城を落ゆく折しも。乱軍に隔られ。ひとり彼此を吟呻

り。まづその故を糺明するに。勇藏憚る所なく。缺皿が過わが身の所存。詳に申せしかば。兵衛ましくさへ。殺すべきに定おくを。みづから碎て主を侮ること安からぬ。以後の見懲し兩人とも。覚期せよと罵りつゝ。缺皿と勇藏を。高手小手に縛て。庭の松に繫とめ。なほ罵りて「下いふやう渠奴等ハ。今夜蚊に吸せ。思ふまゝ苦しめて。その後空井へ投下し。生埋になしくれん。もし逃しなバ汝等も。同罪なるぞといひわたし。一室に入りて休足せり。兵衛が庭の空井戸といふハ。求めて堀しものにあらず。むかしよりこの笄ありしを。便物数奇にて。井戸のごとくせしものにて。たえてその深さをしらず。日毎に芥を掃入るれど。終に埋りし事もなきに。彼一人今宵その裡へ投こまれなバ。生なから捺落の底へ陥るに異ならず。と妻の小舟もふかく憐み。侍児婢もろともに。痛しくハ思へども。主人の怒りつよけれバ。いひ「有んとするものもなく。うちこそりつゝさゝやきあひぬ。かくてその夜も暮過て。雨ハ霽ても身ハ晴ぬ。心小ぐらき木下闇。膚を敷蚊に刺れても。拂はん手さへかなはねバ。おなじ縲縲もわれ故に。繁る罪のよしなやと。缺皿勇藏を見かへりて。御身筋なきわざをなし。みづから非命に死給ふも。過世の悪因なるべけれど。かねてわらはと訊ありて。方人やし給ひし。と人に思はれんもいと朽をし。今ハこの世のおもひでに。卒心あかし給へといへば。勇藏莞然とうち笑て。われハ元雲州富田の城主。塩谷駿河守師高の家臣に。木村源七が下甥。同苗三重之介といひしものにて。師高滅亡の時ハ。僅七才なりしが。叔父源七に伴れ。富田の城を落ゆく折しも。乱軍に隔られ。ひとり彼此を吟呻



り。缺皿がありし世の姿かはらずあらはれ出。さも苦しげなる聲音にて。件の皿をかぞへける。一ツひとりか二人の最期。三ツみな四になき魂の。ふかく沈し筒五ツ。六ツの街を迷ひ来て。七ツ八ツとハ丑三時。九ツ声もかれぐに。十といひつゝわつと泣姿も声もおぼろけに。見る人膽を冷しけり。かくのごとくなる事夜毎にして。この沙汰世上に高く聞え。彼播州の皿屋敷。幽灵井戸といひ傳へ。かたり傳へたりけれバ。兵衛が妻ます／＼悲しくて。夫が不慮の禍にて。禁獄せられ命危き事。みな是缺皿勇藏を殺し給ひし祟<sup>16</sup>下ならん。せめてなき跡吊ひなバ。その功德にて夫の命助かる事もやとて。一日横坂の圓應寺に参詣し。住持に對面して。怨灵得脱の事をたのみ聞え。既に立かへらんとせしに。この寺の門前にて。おもひもかけず缺皿勇藏にゆきあふたり。小舟ハこれ幽灵ならめと見てければ。噫とばかりにうち驚き寺内に走り入らんとする。袖をひかへて彼一人ハ。声を等して申やう。縁故をしろしめさねバ。疑ひ給ふも道理也。われ／＼その夜殺さるべしと思ひ究しに。夜更人定りて後。兵衛様ひそかに庭にたち出給ひ。わが先祖より定たる家法とハいひながら。皿一枚の故をもつて。人の命をとらん事。不仁とやいはん非道とやせん。しかるに名詮自性の理にて。缺皿と呼ぶ女子に。彼皿をとり扱せしハ。是缺損すべき前表なり。又勇藏が家を思ひ。主を思ひて。残る九枚を悉く打碎しハ。類稀なる大丈夫。賞するにはあまりあり。さりながら。今明白に一人を助け<sup>17</sup>ハ。先祖の撻を破るに似たり。皿さへ家になくならバ。かさねて罪する人もなく。非法もこゝに事果て。撻も今より用なけれど。わが欲<sup>18</sup>こびこれにます事なし。汝等はやく立退て。時節をまちて帰参せよ。命がはりの成敗ぞ。と仰も果ず<sup>19</sup>下一人の髻。刀を抜てかき剪<sup>20</sup>縫ひ。縛の索解釋して。剩<sup>21</sup>路費の金子。十両を給はりしかバ。只是夢のこゝにして。ふかく主君の恩恵を感じ。一人もろともに宅地を立退。夜明て五六里落のびしに。途にて聞バ兵衛様にハ。その朝不慮に召捕られ。禁獄せられ給ひし。といふハ実事かおぼつかなしと。立かへりつゝよく／＼間に。その噂虚言ならず。何とぞ御先途を見とぞけて。再生の恩を報じ奉るべくおもひ定め。この横坂に住家をもとめ。圓應寺の本尊ハ。灵験掲焉と聞及ベハ。一人日毎にこゝに詣。主君の厄難救はせ給へ。と念<sup>22</sup>する外ハ候はず。と語れバ小舟<sup>23</sup>ハいよ／＼不審。わが夫の情にて。御身兩人命助りしといふ事。更に誠とも思はれず。その故ハ。缺皿が幽魂。彼空井戸より夜な／＼あらはれ。碎けし皿をかぞふる声。聞たるものあり。見たるもあり。その怨灵を鎮ん為に。わらはも御寺へ参りし。といひ聞するに缺皿ハ。思はず襟元ぞつと

して。しばし疑念ハ晴ざりける。勇藏や、沈吟して。何條さる事候べき。孤狸がその虚に乗じて。人を妖すわざくにこそ。それがし今宵窺て。性倅見とづけ候べしと申けれバ。小舟もこれに從て。互にその夜の暗号を定め。主従内外に別れ<sup>18</sup>下<sup>19</sup>去りぬ。さる程に勇藏ハ。彼妖怪を為止んとて。その夜更て兵衛が庭に謀び行。築山の蔭に木がくれてこれをまてバ。聞しに違ず缺皿が姿。空井の下よりあらはれ出れハ。勇藏楚と見定て。用意の手裏剣拔出し。はつしと打ハ手ごたへし。忽地井戸へ陥りしが。一反はねて踊り出るを。勇藏透間もなく走り蒐り。十刀あまり刺とほせバ。さしもの化精より果。やうやく息ハ絶はてたり。家内の男女この胖響に驚きつゝ。手に／＼手燭を秉て走り出。みな／＼これを熟視るに。缺皿が幽灵とおもひしハ。角一ツある鹿にして」<sup>20</sup>（挿絵第七図）」<sup>21</sup>」



缺皿が事。くはしく演説せし程に。赤松殿再び驚嘆あり。彼缺皿ハ。前年狼に啖れつると聞たるが。さて八年来兵衛が家に養はれけるよな。いそぎ缺皿勇藏を召すべしと仰ありて。御前ちかく召出され。汝等今下賤に落下れども。その志ハ貴人よりも慕し。殊に缺皿と勇藏ハ。従弟どち也と聞。われ

下十九

なくして頸に一連の数珠を掛けたり。是なん過し春。兵衛が奥長谷にて。尾を射切し蟹なるべきが。その仇を報んとて。兵衛に化て彼数珠を盗去。兵衛が刀の尻鞘を残しとづめて。罪に陥さんとハなせしならん。とみな／＼はじめて曉つ。ふかく勇藏を賞美せり。さて勇藏ハ。この蟹を人夫に扛せて城中に参り。兵衛が罪なき事。件ご申上。すなはち数珠を獻れバ。義則驚きよろこびて。早速兵衛を獄屋より有し出し。只管勇藏が誠忠を感じ給へバ。兵衛ハ罪なき明たちて。下<sup>20</sup>歓びに堪ず。蟹の由來。

なかばら  
媒して夫婦とすべし。今より當家に奉公せよと仰けれバ。兩人承り。有がたき御ごじややあり。

源七一旦家出してその存亡をしらず。勇藏が為にハ幼少養育の叔父也。かたぐもつて。一人が身の暇を賜り。源七紅皿が往方を索ね。今生の對面願ひ足りなバ。その上ハまかり帰りて。御奉公仕り候べしと申上るにぞ。義則ます／＼感心ありて。路費百両を下し給ひ。その願ひにまかせ給ふに。兵衛も面自身にあまり。主従有がたしと御請申て。纏て御前を退ぬ。かの源七紅皿ハ。今いづくにか自身を倚たる。見る人。後の巻の出るをまち得てしらん。

金石目記前編下 果」下 21

今生の對面形の星と云ふ。の上全くうつてゐる。やがて  
仕ひへてこよるる。やがてくつて、感心ありて、此體  
百あらず。人のもの假にうそをきく。多き事。多き事。面目に付く  
あり。もろもろ。後、有ること。唐請きて。願ひ。はす。も。あらぬ。  
かの源七に。今やく。小身を。倚り。うそ。人。後の。卷  
の。生。方。宿。を。うそ。あらん。

盆石廬山記前編下果

東都の飯台下街を前山山麓を後方へ。西方へ。望山峰。山峰の北。士峯の坂。北より白雪。東より南方へ。近頃。飯台山。東海の瀬。山の餘波を看る。東より天台の靈山を流。北より白馬。北より翠嵐。而良より吉原。巽。小深川。乾。小新駄。坤。不寢。雅。む。俗。少。と。便。り。れ。が。る。勝地。小亭。う。曲亭。と。別。若。作。堂。と。稱。一。又。笠。軒。と。呼。做。其。名。字。と。ろ。三。少。し。の。棟。ハ。少。く。夫。天。稟。滑。替。一。長。

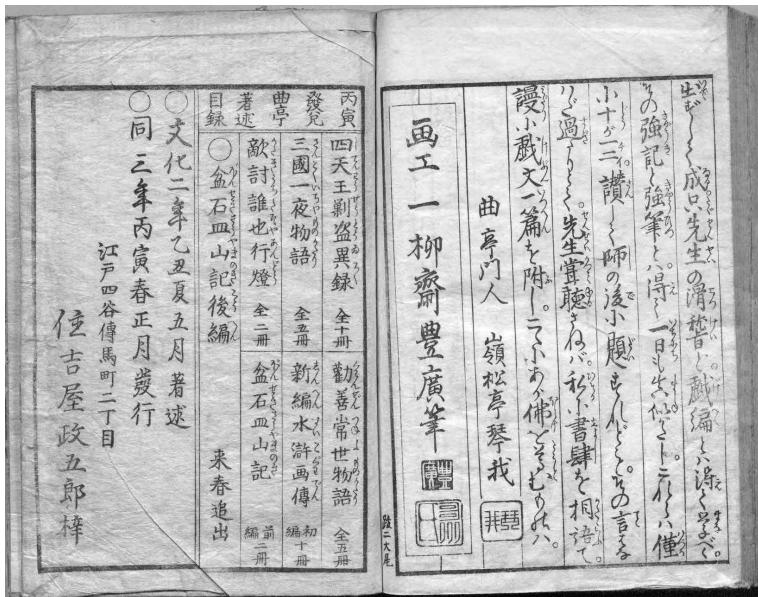
神小少唯一の信言。佛小本來空言詮。宗  
。彼等贈物の種本ハ是自擣。融通。田  
夫。妻市井の童家。一ノ著徧。多ニ見。而  
睡。眠。是。速。秋。背。の。聲。同。と。揚。故。小。先生。此  
表。矣。國。中。小。洋。海。久。方。天。露。之。ろ。あ。す。  
の。城。載。ま。シ。シ。天。主。帝。の。後。る。と。月。天。子。乃  
縣。も。も。う。精。牙。歎。か。く。も。う。車。子。の。到。ミ。人。の。寫  
也。雷。吹。の。く。も。う。瓦。皿。の。乳。ち。の。移。讀。さ。ま。う。  
ふ。一。ノ。と。り。く。遠。方。賓。客。近。隣。の。坊。友。肉。九。橋。た。下。石  
の。起。じ。て。ハ。需。賀。拂。と。訪。鶴。明。と。早。一。と。せ。す。  
著。作。童。時。龍。の。底。小。拂。ハ。雲。流。踏。底。く。萬  
乞。と。舞。せ。ま。う。嗚。呼。高。き。先生。の。名。大。き。故。先生  
の。才。こ。う。尚。古。小。か。く。今。俗。と。る。と。自己。と。み  
常。小。羞。る。色。の。性。強。記。便。能。か。く。著。述。底  
夜。も。と。く。不。熟。ハ。記。臥。て。讀。一。篇。り。作。意。と  
小。ち。う。書。の。小。簡。一。と。が。一。快。の。草。藁。ハ。一。前。と

東都の飯台ハ。下街を前にして。山壇を後にして。西方遠く望ハ。昂ミたる土峯の皎ミたる白雪を眺め。南方近く顧バ。渺ミたる東海の瀧ミたる綠波を見る。東に天台の靈山を拜し。北に白馬の翠嶽を仰。艮にハ吉原。巽にハ深川。乾に新駅。坤に不寝。雅にも俗にも便よき。かゝる勝地に一亭あり。曲亭と号し。著作堂と稱し。又簾笠軒と喚做せり。其名るところ三ツにして。その棟ハ一つにこそ。主人天稟滑稽に長じ。」神にハ唯一の信言を尊み。佛に平來空言を宗とし。彼譬喻品の種本ハ。題目構より融通がよく。田夫山妻市井の童蒙。一たび著編を見るときハ。忽春雨の睡眠を覺し。

はやくしうせう うつもん はら かるがゆゑ せんせい けごう こくちう よういつ ひさかた そら おほ  
 速秋宵の齋悶を掃ふ。故に先生の戯号。國中に洋縊し。久方の天の覆ふところ。あらかねの地の  
 戴するところ。天上玉帝の護るところ。月天子の照すところ。凡血の氣あるもの称讚せざる事」  
 ころ。人のあゆむ所。雷吹のかゝるところ。月天子の照すところ。車子の到と  
 遠方の賓客。近隣の坊友。肉丸橋を下郡の堤に比してハ。霧を拂て訪に鷄明を早しとせず。著作堂  
 を臥龍の庵に擬てハ。雪を踏て來りて鵝毛を辞せず。嗚呼。高かな先生の名。大なる哉先生の  
 才。こゝろ尚古にありて今俗を事とし。よく自己を知て常に羞る色あり。その性強記便敏にして。  
 著述昼夜をすてず。起てハ記し臥てハ讀。一篇の作意はにぢり書の手簡より手がるく。一帙の草藁  
 ハ。一句を」出ずして成。只先生の滑稽と。戯編とハ得て学べく。その強記と強筆とハ。得て一日も  
 真似がたし。これらハ僅に十が一チ二イ。讀して師の後に題すれども。その言はなはだ過たりとて。  
 先生嘗聽さねバ。私に書肆を相語て。謾に戯文一篇を附し。こゝにあが佛を尊むものハ。

曲亭門人 嶺松亭琴我 「琴」

画工 一柳齋豊廣筆 「廣」 「氏」 「我」  
 版 2 大尾



佐吉屋政五郎 梓

江戸四谷傳馬町二丁目  
 ○文化二年乙丑夏五月著述  
 ○同三年丙寅春正月發行



【表紙】

盆石皿山記後編

住吉屋政五郎梓〔奥付〕

江戸四谷傳馬町二丁目

丙寅  
四天王剣盜異録  
三國一夜物語  
敵討誰也行燈  
○盆石皿山記後編  
全十冊  
全五冊  
全二冊  
全二冊  
勸善常世物語  
新編水滸画傳  
盆石皿山記  
編前二冊  
全五冊  
編初十冊  
編前二冊  
全五冊

来春追出

發兌  
曲亭  
著述  
目錄  
○盆石皿山記後編  
全十冊  
三國一夜物語  
敵討誰也行燈  
○盆石皿山記後編  
全五冊  
全二冊  
全二冊  
勸善常世物語  
新編水滸画傳  
盆石皿山記  
編前二冊  
全五冊  
編初十冊  
編前二冊  
全五冊

曲亭馬琴戯作 今刊二冊

## 盆石皿山記後編

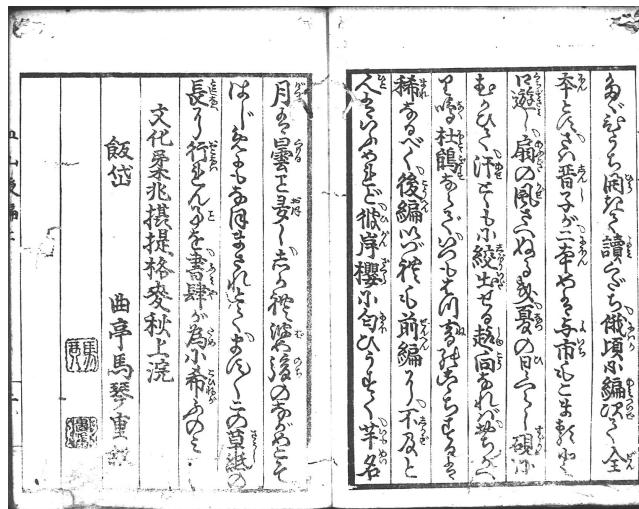
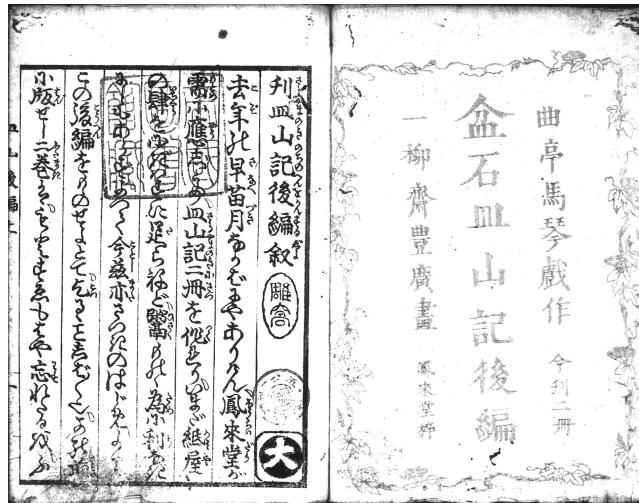
一柳齋豊廣畫 鳳來堂梓

曲亭馬琴戯作

今刊二冊

## 盆石皿山記後編

一柳齋豊廣畫 鳳來堂梓



【叙】

さらやまのきのちのへんをかんするじよ  
刊皿山記後編叙

雕窓

去年の早苗月なかばにやありけん。鳳來堂が雷に應じて、皿山記一冊を作れり。いまだ紙屋の肆を  
にぎはすに足らねど。鬻るものゝ為に利なきにしもあらず。よつて今茲亦さつきのはじめより。この  
後編をものせよとて。乞るゝことしばゝ也。かの前に版せし一巻は。もとすゑもはや忘れたるを。  
ふたゝびうち開きて讀くだち。俄頃に編次て全卒とす。さハ晋子が。一卒めは与市もこまると口遊  
し。扇の風さへぬるき。夏の日くらし硯にむかひて。汗とゝもに絞出せる趣向なれバ。おちかへり

鳴杜鵑ならで。いつもはつ音のこゝちするは稀なるべく。後編いづれも前編に。不及と人はいふめれど。彼岸櫻に匂ひうすく。芋名<sup>いもめい</sup>月は曇こと<sup>くもる</sup>。おほほのち婆後のながめこそ。はじめにもなほまれとて。ます／＼この草紙の長に行れん事を。書肆が為に希ふのみ

文化柔兆撰提格麥秋上浣

飯岱

曲亭馬琴重叙

馬琴  
著作堂

（後編目録）

後編目録

第六 犬の皮<sup>くしか</sup> 煙<sup>かわしとね</sup>

第七 大澤の闇<sup>おほほは</sup> 撃<sup>やみりら</sup>

第八 因果の鐺<sup>いんぐわ</sup> <sup>あしなべ</sup>

第九 熊野路の露<sup>くまのぢ</sup> <sup>つゆ</sup>

第十 忠孝の世榮<sup>ちうこう</sup> <sup>よのうかへ</sup>

通計五箇條目録畢<sup>つがうごかでうもくろくをはんぬ</sup> 2

木村三重之介勇藏<sup>きむらみへのすけたけよし</sup>

児さくら 手折らば人の肩車<sup>ひこ</sup> <sup>かたくるま</sup>

（口絵第一図）



〈口絵第二図〉



紅皿



鹿の角  
まづうら枯の  
すがたかな

通紅寂靈和尚

鹿の角

まづうら枯の  
すがたかな

鍋の尻 かくまで雪にとし暮ぬ

紅皿

〈口絵第三図〉



山鉄山

寐ぬ門へ おふむかへしの暑かな

<sup>4</sup>

錦着て 立り故郷の 煙のやま

缺皿 重て出



缺皿 重て出

〈口絵第四図〉



缺皿 重て出

錦着て 立り故郷の 煙のやま

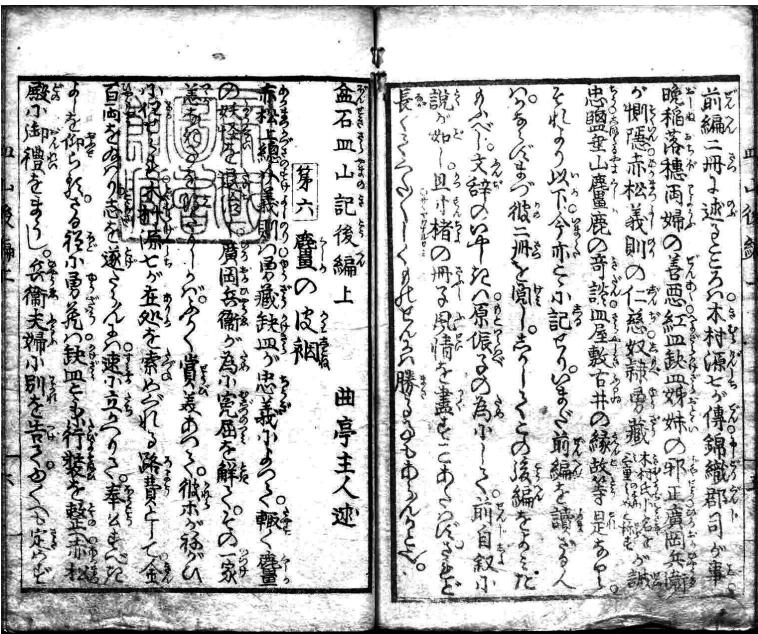
山鉄山

寐ぬ門へ おふむかへしの暑かな

<sup>4</sup>

【再識】

前編一冊に述るところハ。木村源七が傳。錦織郡司が事。晚稻落穂兩婦の善惡。紅皿缺皿姉妹の邪正。廣岡兵衛が側隱。赤松義則の仁慈。奴隸勇藏の縁故等是なり。それより以下。今亦こゝに記せり。いまだ前編を讀ざる人ハ。かならずまづ彼二冊を閲し。しかしてこの後編をよみたもふべし。文辭のいやしきハ。原儀子の為にして。前自叙に説が如し。且すんちよの冊子風情を盡すことあたはず。されど長くてくたゞしくものせんにハ勝る事もあらんかと也。」<sup>5</sup>



曲亭主人述

第八 瓢の皮裯

盆石皿山記後編上

赤松上總介義則ハ。勇藏缺皿が忠義によつて。輒く瓢の妖怪を退治し。廣岡兵衛が為に冤屈を解て。

あかもうかづのすけよしのり

ゆううづかけさら

ちうぎ

たやす

くしか

ようくわい

たいぢ

ひろおかひやうゑ

ため

むじつ

つみ

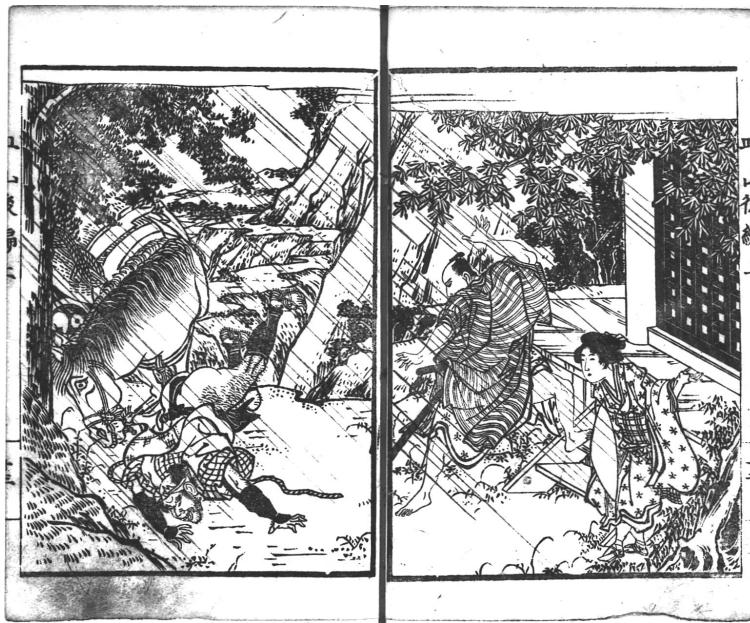
とき

その一家恙なき事を得たりしかば。ふかく賞美あつて。彼等がねがひに任せられ。木村源七が在処を索めぐれる路費として。金百両を給はり。志を遂たらんにハ。速に立かへりて。奉公すべきよしを仰らる。さる程に勇藏ハ。缺皿とゝもに行裝を整へ。赤松殿に御禮をまうし。兵衛夫婦に別を告て。ゆくへも定めず。首途せり。これみな彼等が忠孝の天助によつて。主従一時に面目を施し。いいへど。もし義則寛仁大度の良將に坐さずハ。有がたかるべき僥倖なり。こゝをもて廣岡兵衛ハ。國守へ些の報ひをなし奉らばやとて。勇藏がうち當たる蠻の皮を柄に作らせ。これを義則に獻じける。この柄ひろき事半席にあまり。毛も又柔にして蚤を退。居こゝろ寔に比なかりし程に赤松殿ふかく愛よろこび。常住坐臥にはなち給ふことなし。頃しも文月上旬のことなるに。義則件の柄を端ぢかう布せて。庭の秋草をながめ給ふに。夕月も隈なく出て。ひよろ／＼と白露の。萩の葉すゑに登れるなど。又一しほの風情なれバ。漫に坐をたちて。飛石つたひに彼此を従し給へり。この時義則の嫡子佐用丸とまうして。年才五ツになり給ふが。跡に居かはりて。



彼の坐し給ひぬ。浩處に今まで  
よく晴たる天。俄頃に結陰。風ざとお  
ろし来る程こそあれ。のぞみよすみ  
から巻かへりて。佐用丸を中に包み。  
虚空遙に飛揚して。往方もしらずなり  
けれバ。赤松殿ハさら也。傳の老黨。  
乳母女<sup>おちめ</sup>の童<sup>わらわ</sup>など。駭<sup>おどろ</sup>きさわきて。  
弓矢薙刀<sup>ゆみやなぎなた</sup>を携<sup>たつきへ</sup>。其處<sup>そこ</sup>かこゝかと罵<sup>のゝしり</sup>あ  
ひ。只顧<sup>ひたすら</sup>に散動<sup>さんどう</sup>けども。雲居<sup>くもる</sup>に閉<sup>ひ</sup>ぎ登れ  
るを。いかにともすべき「挿絵第一図」  
「やうなし。遮<sup>さま</sup>あらべあれおつ  
通宵<sup>よもすがらたづね</sup>索<sup>さく</sup>めぐれども。それかとおもふ  
よとて。城中城外野山<sup>じょうちうじょうがいのやま</sup>のきらひなく。  
のものも見えず。なほ海陸<sup>かいりく</sup>となく。詰朝<sup>あけのあさ</sup>よ

り追人をかけらるゝに。日ハ徒にたちゆくのみにて。絶てその信も聞えざりし程に。義則ますく  
憤に堪ず。安からぬ事かな。悪観いかばかり神通を得たれバとて。死して僅に畠たる。只一枚の皮  
に。わが子を取られし事。室町殿ハ勿論。隣國の諸侯に聞れんも面ぶせなり。こハ武運にも竭しかと  
て。日毎に歯を切り。蒼天をうち仰ぎて。罵り給ふぞ理なる。ましてや義則の奥方ハ。哀傷に袖さ  
乾かず。泣あかし泣くらし。あらふる神<sup>8</sup>。佛に祈願して。今一たび佐用丸にあはせ給へとかこち給  
ひぬ。かゝりし程に廣岡兵衛ハ。此度の殃。みなわが身ひとつの恨也と思へバ。いと影護て。ふか  
く引籠居たりしが。つらく縁故を考るに。彼壇飲までしうねくして。死後なほ崇をなせし事。  
唐山にもさる例<sup>9</sup>あり。太古大人の女兒馬皮に巻れて樹の又に掛け。女兒と馬ともろともに。蠶と化  
けるよしを。搜神記に載たりしに。われこゝに心つかずして。國守に禍をうつしながら。安然とし  
て居るべき謂なしと思ひ定め。軀て赤松家の老黨泊野韌負につきて申けるハ。佐用丸ゆくへなくな  
り給ひし事。兵衛が過なり。させる咎ハ蒙らねど。その罪ハみづからしれり。しかば立地に腹  
かき切りて。罪を償ひ奉るべし。とハ思ひながら。兵衛が死したりとて。若君のかへり給ふにもあ  
らず。只ねかはくハわが首をしばしわが軀にあづけられ。身の暇を給はらんにハ。高麗唐土の果ま  
れ頃日夥の士卒を走らせ。普く索めぐら<sup>10</sup>。せても。なは便を得ざるもの。彼弥勇に思ふとも。  
いとおぼつかなき事也かし。しかハあれ。兵衛ハ日來義に勇むもの也と聞り。もし聽ずハ可惜丈夫を  
を死さん歟。ともかくも彼がいふ隨になさせよと仰ける。兵衛ハ上百を兼て大に歎び。内室小舎にハ老  
たる奴婢をつけおきて。山脇に残しとゞめその身ハ團吉といふ下郎一人を従へ。大和河内にハ深山  
も多ければ。まづこの両國を索ばやとて。既に長旅の用意をしつ。遂に播州を發足せり。是ハさてお  
き紅皿ハ。三年已前に故郷を追放せられ。美作播磨のうちに足をとゞむる事を許されねバ。彼此を  
呻<sup>11</sup>吟て。遂に津國より大和路へ迷ひ出て。待乳越にかゝりける日。畠田のこなたより。戻馬率つゝ。  
旅人まちがほなる馬士。彼がひとりゆくを見て。こハ欠落もの也と思ひしかバ。後になり先にたち。  
仮初にものいひかけて。さまざまに勵慰め。御身が疲労たる形容を見るに。いと痛まし。わが馬に



乗り給へ。家に伴ひて今宵ハあるじせんといふ。しかれども紅皿ハはやくその心を猜し。よきに回答  
てとりあはず。彼をやり過さんと思ひて立在ハ。馬士も亦停立。走れバ人も馬ももろともに走り来る  
にぞ。いよ／＼思ひ惱る折しも。一驟雨のさとふりて。忽地盆を覆すがごとくな<sup>10</sup>るに。馬士ハ  
ふためきて。荷鞍に結びつけたる笠をとらんとするに。あやにくに風にあふられて。頓にハ紐の解  
やらず。紅皿ハすハこの隙にとて。路四五町走り抜にけれど。雨ハます／＼降る程に濡たる衣の手足  
にまつはり。路又いたく滑りて思ふまゝに走り得ず。と見れバ路傍なる大榎の下に。山神の禿倉か  
とおぼしきがありければ。この軒下にかくろひて。しばし晴間をまつ程もあらせ。彼馬士ハ漬淖に  
なりて追ひ來たり。馬をバ榎に繫出つゝ。紅皿が襟上纏て引ぎり出し。這奴甚<sup>はれま</sup>ものをしらず。われ  
ハ慈眼をもて。汝がひとりゆくを憐み。わが馬に乗せ<sup>はせま</sup>てわが家に伴んといふを。あしう聞バ  
そ。逃もすれ。その義ならばすべきやうありと罵り。やがて紅皿に手拭はませ。わりなく馬に搔  
き乗せんとする処に。思ひもかけず禿倉の裡より。三十餘歳の武士一扇をさと押開て走り出。矢庭に  
馬士が肘をとつて撰地と投つくれば。  
こハ朽をしとて起んとするを。刀の  
脊もてりうりうと打すえ。此奴憎べ  
し。伴のなき女子と侮りて。かく理不盡  
なる所行をなすハ。勾引さんとの計較  
なるべし。この街道にて。おり／＼  
さる癖者ありと聞つるが。わが眼にか  
りてハ許がたし。観念せよといひ  
もあへず。ふたゝび刀をぶり揚れバ。  
馬士ハ噫と叫び<sup>11</sup>て見かへるに。この  
人ハ是。二見と上野の間なる。犬飼の郷  
にて。錦織兜三二と呼るゝ劍法の師匠  
なれば。驚き怕れて返答にも及ばず。馬  
を捨て逃げ去りけり。兜三二ハ遙に

目送りて。から／＼とうち笑ひ。さて紅皿に對ていふやう。汝が為体此わたりのものともおぼえず。いかなる故ありて。遠く迷ひ来るぞと問バ。紅皿答て。わらはは作州皿山なるものなるが。いかなる故ともしらず。親族俄頃に罪せられて。悉く死亡。わが身ハ國の境を追れて。寃によるべきまゝに。そこはかとなく呻吟て。この処まで來たりしに。彼馬士情を見せて。家に』  
『挿絵第一  
図』<sup>12</sup> 伴んといふ。こハ誠の心もてしかいふにハあらず。賺こしらへて妓院などに賣らんとする底意なりとおもひしかバ。むら雨の降出たるを幸にして。只顧に走り抜んといたせしに。躰れはた果さずして既に難義におよびしを。かく救ひ給はる事。再生の恩いつの世にか忘れ侍らんといふ。卯三二点頭て。さもこそあらめ。われ此禿倉に走り入りて。雨やどりせずハ。汝ハかならず活地獄へ堕さるべし。美作ハわが故國なるに。彼處の人ときけばいとゞ見するに忍がたしわが家に來れ。よきに養ひ得せんといふに。紅皿ハ暗き夜に月の光を見るこゝちしつ。伴れて犬飼に到りぬ。抑この錦織卯三二ハ。美<sup>13</sup> 作國二宮村の郷士錦織郡司が甥也。いと弱年より義氣ある男にて。一たび郡司に養れ。その家を嗣べき人なりしに。養父郡司罪ありて。世帯を没収せらるべしと聞えたるころ。その過をわが身に引稟。みづから罪せられんことを申出にけれバ。郡司もいと便なく思ひて。夥の金錢を惜まず。彼が為に命乞せし程にやうやく死刑を脱れて。故郷を追放さる。しかりしより卯三二は些の由縁をもとめ。大和の大飼に來りて。做ひ得たる釿法を指南し。こゝにあること十五六年に及びしかば。里人等敬ひて。他事なくもてなし。媒するものありて。久米氏の女を娶り。市平といふ。奴隸一人をめしつかひて。富にハあらねど。世をわたるに易し。さても卯三二ハ。その日紅皿を伴ひかへりて。妻にも彼がうへをものがたり。なほよく素生を問に。たえて久しく音耗なき。作州の伯父錦織郡司が名迹を相續したりける。源七といふものゝ女兒也と申にぞ。此母子が邪なりしをしらねバ。夫婦いよ／＼憐みて。是より下女として町隣に養ひ。はやく三年の月日経て。紅皿既に十六歳になりぬ。しかるに今茲春のなかばより。卯三二が妻風のこゝちとて打臥たるに。藥餌も驗なくて。次第によはりゆくばかりなれバ。紅皿ハ竊に歎び。あはれこの人いかにもなり<sup>14</sup> 給へかし。われその跡へおしなほりて。世を安く送るべきにと思ひながら。さらに色にも顯さず。昼夜看病して。次第によはりゆくばかりなれバ。紅皿ハ竊に歎び。あはれこの人いかにもなり<sup>14</sup> 給へかし。わむなしうなりにけり。七々の追善かたのごとく營つゝ。去者ハ日暮に疎なりゆくが世のならひなれ

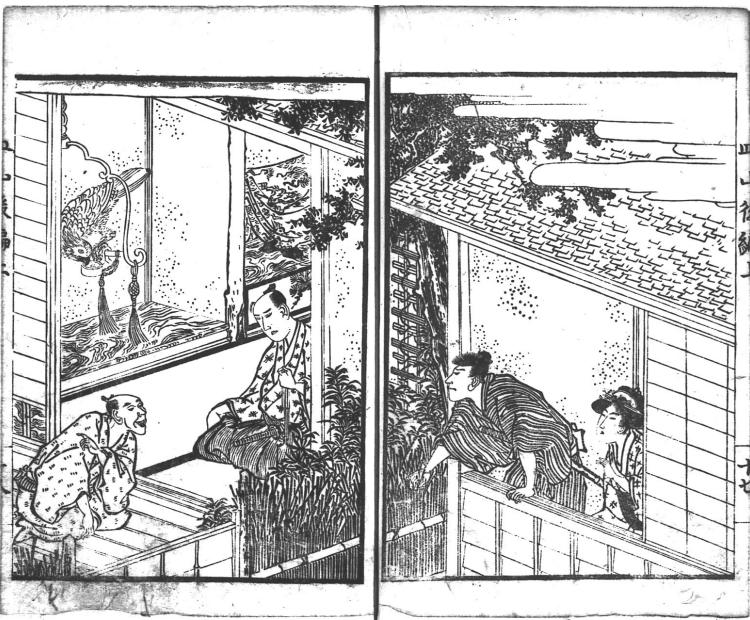
バ。卯三一も独寐の枕さみしさに。紅皿を妾とせり。彼女子究て淫婦なるに。世才人に勝れたれバ。只顧媚であるじの心に稱やうに擧止ほどに。卯三一もいつしかにこゝちまどひて。後妻にもせまほしく思へども。われにハいたく年才の劣りしをもて。默止せしとぞ。されど何事も卒妻に異なることなく。よろづ家事をうち任せける。

## 第七

### 大澤の闇撃

こゝに亦久米鉄平といふものありけり。これハ卯三一が妻の従弟にて。ちかきほとりに住居せしが。いとはやくより孤となり。年既に廿五才に及べり。彼内縁のものなれバ。卯三一も年來鉄法射藝を教へ。三年あまり前に洛へ上して。奉公を擇せけれども。万能の勝れたるも一心の正しきに不及。器量骨柄ハ人なみに超たれど。その行ひよからずして。彼此を漂泊し。遂に身の」<sup>15</sup> よるべなさに。このころ大飼へかへり來にけれハ。卯三一彼が放蕩を怒るといへども。妻の世<sup>よ</sup>を去りて程もあらぬに。その従弟なるものを追ひうしなはゞ。なき人もさこそ心憂かるべけれと思ひかへし。さま／＼教訓して養ひおきぬ。しかるに紅皿ハ。卯三一が声色に泥まで。門人の許より得たりける。舶來の鶴鶴を寵愛し。又武稽指南の暇ある日ハ。山獵して。朝より夕まで。家にある事稀なれば。いたくうらみて疎しうおもふ折しも。鉄平が年もわかくて。よろづ風流たるに。三とせが程に見なれたる。都の手ぶりさへ。こゝの里人に似るべうもあらねバ。密に目をもて思ひを」運せしかバ。鉄平元來色このみなるに。紅皿が姝きにこゝろを動して。膽ふとくも恩ある人の傍妻と密通し。をり／＼あるじが畠守を窺て相語を。卯三一は更にしらず。その年の八月上旬。雨の日のつれ／＼なるまゝに。ひとりもたれ柱によりて。孫氏が兵書を讀つゝ。不圖柱に掛たる筈の中に。鸚鵡の囀を聞けバ。紅皿と鉄平が。密言を口真似す。こハあやしとて。なほ耳を側だてゝ。聞に。疑ふべうもあらぬ。彼二人が密會日の相語なり。ものに驚き鞅掌ざる卯三一も。怒り心頭に發りて。直にうちも果すべう思ひしが。やゝ胸を押鎮め。まづあたりを見る」<sup>16</sup> に。紅皿ハ脊門の板間の雨漏をとめんとて。鉄平とゝも彼處にあり。又厨のかたにハ。奴隸市平が。龜架を打こなして居たりければ。密に招き。只今かゝる事あり。汝ハ定めてよく縁故をしりてこそあらめ。彼等が不義の為体を審にしらせよといふ。この市平八年五十にあまりて。鈍ものなれど

も。人を憐むの心ふかゝりし程に。はじめハ明白にも告ざるを。卯三二いたく責間にぞ。遂に匿がたくて。僕も楚と見とめたる事ハあらねど。宣ふごとく。彼二人の景迹にこゝろ得がたき事が多しといふ。卯三二點頭て。われ明日すべきやうあり。汝かなならずこの件」<sup>くだり</sup>（挿絵第三図）」<sup>17</sup>



る志<sup>こころ</sup>ハ盡さずとも。かゝる畜生<sup>くきょう</sup><sup>18</sup>の行ひハすまじきに。形のみ人なみにて。心ハ犬にも劣りたるものども也。這奴等が首をならべん事。今宵の中を過さじと思ひしが。又おもふやう。わが家にてこれを殺し。人をさわがせんハ恥のうへの恥なり。とかく里遠き山中へ誑引出し。なぶり殺しにしてくれんずと。既に思案を定め。さて次の日天も晴けれバ。その日の昼過て。紅皿<sup>べにわ</sup>も鐵平<sup>てつひら</sup>にいふやう。われ今夜大澤へゆきて。虫を聞んとおもへバ。汝等をも伴ふべし。割籠の用意せよといひおきて。弓矢<sup>ゆみや</sup>携つゝ庭に立出。巻藁射<sup>まきわらい</sup>てぞ居たりける。紅皿<sup>べにわ</sup>も鐵平<sup>てつひら</sup>もかゝるべしとハ思ひもよらず。鮎のしら焼に。握飯<sup>にぎりいひ</sup>を割籠に<sup>わりご</sup>詰。吸筒<sup>すひづ</sup>席<sup>むしろ</sup>やうのもの。すべて携ゆくべきをハ。悉くとりあつむる程に。日もやゝ西へ没なんとす。この時奴隸市平ハ。主人卯三二が日來劇しき心ざまに似ず。彼二人が

不義を曉得ながら。今夜虫間に併んといふこそ。心にものあるなるべけれ。それをしりつゝ刀の鋒となさん事。いたましと思ひしかば。彼二人をもの蔭にさし招きて。きのふよりかゝる事あり。もし大澤へゆき給はゞ。大なる禍あるべし。その心して途より逃去給へかしと密語バ両人聞て驚き呆れ。しばし忙然として居たりしが。悟と思ひかへして。市平に對ひ。よくぞしらせ給ひたる。身におぼえハ<sup>19</sup>なけれど。機に臨て安全の計をなすべしと回答ける。時に卯三二庭より立かへりて。はや時刻になりぬ。誘ゆくべしと。いふ。紅皿ハ市平がものがたりにて。鸚鵡が口さがなくて。わが密夏をあらはしたりと聞てふかく憎み。常のごとくとまり餌を飼さまにて。竊にその餌に夥鹽を搗ませて。筈に入れおき。手ぢかなる金を盜て懷にし。二人もろともに立出けり。彼大澤といふハ。犬餌より遙西北にあたれる。山の麓なれば。ゆきもつかざる間に日は既にくれたり。卯三二ハかく謀ぬれど。慮ふかきものなれバ。只仮初に。鳥の疇<sup>20</sup>を聞。市平がおぼろけにいひしのみにて。みづから認たるにあらねバ。今宵よく不義の證据をあらはしてこそと思ひ。待乳山のこなたを過るとき。鉄平紅皿を見かへりて。われハ石寺へ立よりて。跡よりゆくべきに。汝等ハまづ彼処に到りて。よき木の下に席布まはして待候へといひかけて。みづからささやかなる挑灯をともし。路を横ぎりて。立わかれしかば。紅皿密に鉄平が袖をひかへて。彼人石寺へ立よるとてわかれしハ。大なるゆけと<sup>20</sup>いふハ。彼人ふかき謀ありとおぼし。もし愁に逝去らんとせバ。みづから不義の證据を見せて。いかに侮るもかひあるべからず。夫先ずるときハ人を征す。こゝに及びて何ぞめししく逃走らん。われ期に于て計あり。そハかやうく也と私語バ紅皿聞て打おどろき。さすがに心決せざるを。鉄平頻に勧励し。こゝより経をめぐりて直に大澤へハ到らず。却<sup>21</sup>卯三二を遣過して。その後へまはらんと計較ぬ。卯三二ハ密計を市平が漏したるをしらず。彼二人を挾にあゆませんにハ。夜に乗じて淫がはしき挙止をなすべし。そのとき<sup>22</sup>後よりつけゆきて。彼等が罪を數へ。首打ち潜やかにあゆみよりて見るに。そのものどもにハあらずして。旅人とおぼしき武士の。病臥せるなりしかば。心忙しき折なれど。さすがにいたましくてうちもおかれず。その國処名氏をたづね。

さまぐに勧れバ。彼旅人も好意の程をよろこび聞え。さていふやう。われハ播州山脇の郷士にて。

「<sup>21</sup> 廣岡兵衛と呼るゝもの也。人を索ん為に。いぬる月故郷を旅だち。河内國を徧歴して。この大和路へ出る折しも。はからず瘧を患てゝと惱しくハあれど。事急なる旅をすれバ。保養に遑あらず。間日はやく宿を出。待乳越して紀路へ赴んとせしに。思はずも路に迷て黄昏に及び。剩寒熱頻に發りて。一足も歩みがたく。藥ハ懷中したれども。咽喉かはきて堪がたけれバ。近きほとりに人住む里やあるとて。一人の従者を見せにつかはせしが。いまだ帰らず。日は既に暮<sup>22</sup>てかかる仕合也といふ。郊<sup>23</sup>三三一ハ縁由を聞てふかく痛しみ。心の中に思ふやう。われ縦今宵紅皿鉄平を助おくとも。この旅人を救はずは。人たるものゝ心にあらず。彼等が事ハ後にしてまづこの人を勧り得させんにハと思ひて。いよ／＼信やかにもてなし。不知案内の深山辺にて劇しき病の發り給へバ。さそな心くるしくおぼすらめ。此わたりハすべて九折にて。路もさだかならぬバ。従人をつかはし給ふとも。輒く人の家に索ゆかるべうもあらず。われハ犬飼といふ処に久しく住居する武士の浪人。錦織郊三三といふもの也。しばし待給へ。われゆきて一挺の轎を傭ひ。御身を乗せて家に伴ひ。一夜のあるじいたすべし。こゝろ」<sup>22</sup>づよくおぼせとて。町<sup>24</sup>喧に聞えおき。もてる挑灯をバ兵衛が頭の上にさし出たる。松<sup>25</sup>が枝に結びさげ。熟し路なれバ闇<sup>26</sup>を厭<sup>27</sup>。人家あるかたへ走りゆくにぞ。兵衛ハ只顧その志をよろこびつゝ。なほ舊の処に打ふしたるに。且して熱氣も少しきめたりしかバ。松の幹へ手をかけて。やをら立あがる折しもあれ。久米鉄平ハ紅皿を將て経よりこゝに來り。彼挑灯を目當にて。是なん<sup>28</sup>夷<sup>29</sup>三三一なりとおもひしかば。途にて用意せし手矛を閃かし。声をもかけず廣岡兵衛が。馬手の膳<sup>30</sup>へぐさと刺。穂先四五寸衝出せバ。こゝろえたりと拔あはし。矛の真中切折たり。鉄平すか<sup>31</sup>さす刀を引抜。たゞみかけて切ほどに。兵衛ハこゝろ勇しといへども。病たるうへに不意をうたれ。數ヶ所のふかで深手により果<sup>32</sup>。礪と倒れて死したりける。鉄平ハ既に為課て刀の血を押拭ひ。彼挑灯をとつて屍を見るに。郊<sup>33</sup>三三一ハあらずして。見もなれぬ旅人なれバ。紅皿と顔うち見あはし。呆て立たる後方より。忽地人の來る音すれバ。こなたの挑灯うち滅しつゝ。さゝやきあふて逃去けり。さる程に兵衛が従者團吉ハ。彼此となく索ねありきしに。近きほとりにハ宿かるべき家もあらず。主君の事いと心もとなさに。又舊の路に立かへれバ。思ひもかけず主の兵衛は。段々に<sup>34</sup>切ふせられ。血に塗れて

死したれば。おどろき瞭して抱き起し。呼び活れどもそのかひなく。あまりに淺ましくてせんすべを  
しらず。かゝる処に錦織袴三二一ハ。待乳茶屋のほとりにて轎を借出し。蕉火ふりてらしていそがし來  
るを。團吉ハ木間にありてつらゝ見るに。主の屍の傍に捨おけりし挑灯のしるしと。只今前にす  
なりといへども。當の敵やハ脱さじとて。いよく身を潜めて閨居るともしらず。袴三二一ハ遙に声  
をかけて。いかに旅人。轎を扛せて來たれり。いざ乗り給へといひつゝ近くよるを。團吉ハせきに  
せいてそのいふ処をも聞とめず。木蔭より跳で出。やと声かけて切つくるを。袴三二一身をひねりて刀  
の锷元しかと取り。こハ狼藉なり。何の遺恨ありて。だまし討にハするぞといはせもあへず。團吉声  
を高して。卑怯なり。この期に及て。脱んとするとも。いかでか脱さん。われハ汝に擊れたる。播磨  
の旅人。廣岡兵衛が奴隸に。團吉と呼るゝものなり。わが主病を推て紀路へ赴んとしするに。こゝ  
に來たつて。病劇しく見えつれバ。湯を乞。宿をももとめんとて。我ハ彼此を走めぐり。今立かへる



に思ひもかけず。主をうたせて仇人だ  
るに。潛に汝が衣服の紋を見れバ。主の  
屍のほとりに。<sup>24</sup> 捨ある挑灯の識と是  
おなし。思ふに汝支黨を相語來て。こ  
の屍を扛もてゆかせ。埋葬さんとする  
にこそ。既に發見るゝからハ汝も壯夫  
也。只潔く名告あひて。勝負を決せ  
よと叫びつゝ。もぎはなして切らんと  
す。死三三一ハこれを聞てますゝ怪み。  
かい禰たる手をゆるめず。馬手に蕉火  
をあげて。彼旅人を見るに。鮮血なが  
れわたり。肢体ハつゞける処もあらね  
バ。駭然として大に驚き。丁と飛退つゝ

りやうとう なげいだ  
両刀を投出し。こやはやまるべからずぐ。われ實に兵衛殿とやらんを殺さず。つくぐと縁故を  
かんがふ  
考るに。わが機密はやく漏れ。鉄平がこの人を。われなりと思ひ悞りて。かく刃傷に及べるなるべ  
し。こハ「一夕に説盡すべう」〈挿絵第四図〉<sup>25</sup>もあらず。もろともわが家に來候へ。おのづから  
其許の疑ひ解なんといふに。團吉ハなほ心をゆるさず。されど両刀を投遞して。赤き心を示すうへ  
ハ。理不盡に討果がたくて。しばし憤を忍て黙止しけり。さて卯三二ハ。兵衛が屍を轎に扛乗せさ  
せて。團吉を誘引。遂にわが家に立ちへりて。二人の轎夫をバ帰し。まづ團吉に。鉄平紅皿が一件の事  
を物がたり。彼等不義あるによつて。今宵大澤へ誑引ゆきて。首を刎んと思ひし事。又兵衛がみちに  
病臥たるを見て。痛しさに。扶掖で家に伴んと思ひ。待乳茶屋のほとりに走りゆき。轎を借出して立ち  
かへるに。あへなく。兵<sup>26</sup>衛が撃れしハ。彼鉄平。わが松が枝に結びおきたる挑灯を見て。われ也と  
思ひ悞りて。彼人を殺し。紅皿を將て逐電せしならんと思ふ事など。くはしく説しらせ。さるにても  
鉄平が。はやくわが機密を曉りたる事いと不審として。やがて市平を呼出し。汝口さがなくて。きの  
ふ鸚鵡の囀につきて。わが問し事を。彼二人にしらせたりとおぼし。とく明白にいへ。いはずハす  
べきやうありと責問にぞ。市平ハ人を助んと思ひて。却て殃を釀せしかば。大に當迷して脱るゝに  
ことばなく。宣ふごとくきのふ問せ給ひし事を。彼人たちに私語候ひしといふ。この時卯三二ハふたゝ  
び團吉に對ひ。聞せつるごとく。兵衛殿をうちたるものハ我ならず。今ハ疑念もはれたるべし。ま  
づ件の事を縣主へ訴聞え。其許ともろともに播州へ赴きて。彼人の親族を伴ひ。鉄平紅皿を索めぐ  
りて。終にハ這奴等を捕て仇を報せ。わが曇なき心の程をもしらすべく思ふなり。抑廣岡氏ハ。何に  
の故ありて重病をも厭す。慌しげに旅をバし給ひしと問に。團吉ハ兵衛が佐用丸を索に出了る縁故  
を審に物がたれバ。卯三二ますく嘆息し。かゝれバ其許の主君ハ義士なり。われその妻子に力を  
戮せ。彼人の志を繼せずハあるべからずと憤激せり。さて天ハ明にけれど。思ふに違はで紅皿鉄平  
ハかへらず。鸚鵡も筈の中に<sup>27</sup>死したれバ。これさへ彼等が所為かと思ふに。いよく怒に堪ず。す  
なはち縣主に縁由を訴。兵衛が屍をバ一片煙となして。白骨を壺に藏め。これを團吉が項にかけさ  
せ。家をバ人に与へて帰らざる心を示し市平を將て二人もろともに播州に赴きしが。次の日人迹稀  
なる曠野を過る時。卯三二ハ市平を見かへりて。汝下郎とハいひながら。口さがなくて。わが機密  
を。鉄平にもらせしより。思ひもかけず廣岡氏に殃せり。われ今汝が首を刎て家裏とし。彼家に贈

らんと思ふ也。とくにも殺すべかりしに。人をさわがせじとて。こゝまでハ召つれたり。みづから思ひしるべしといひもあへず。首宙に打おとし。是を「<sup>こゝ</sup>までハ召つれたり。みづから思ひしるべしといひもあへず。首宙に打おとし。是を」携て播磨に到り。國守赤松殿に一件の事を申述。さて兵衛が家に到りて。小舟に對面し。兵衛が枉死。わがうへ。鉄平。紅皿が事を。審に説しらせ。これその殃の原なれハ。誅し了れりとて。市平が首をとり出てさし示せバ。團吉ハ項にかけたる主の白骨をとりおろし。大澤へ到るまで。路すがらの事を申けり。小舟は夫があへなき死をかなしみ。見しにハかはる白骨の。壺かき抱きて轉輾。哀傷大かたならざりける。その時卯三二一ハ。小舟を諫励し。悲歎理ならずとハ思はねど。いかに歎き給ふとも。死ししたる人の再び活べきにあらず。それがし不才なれども。武藝を<sup>28</sup>もつて人の師たるもの也。御身に助太刀して鉄平を擊ざる間ハ。わが身を潔とするに足らず。その心ぐるしさハ。この一家の人に異なる事なし。とく／＼涙をとゞめて事を議し給へと勧れバ。小舟もこれに励されて。形をあらため。御身のうへを聞侍るに。原ハ美作國二宮村の郷士。錦織郡司の甥にて。前國守のとき故ありて。故郷を立退給ひとか。かゝれば缺皿が父源七とも。相語バ由縁ある人ぞかし。又紅皿と宣はするハ。缺皿が妹の事にて侍るべし。わが方にも如此ぐの事ありとて。木村源七が錦織氏の名迹相續せし事より。晚稻落穂が事。缺皿紅皿勇藏等が事」すべて一箇子の首尾を物がたり。もし勇藏缺皿があらんにハ。心づよくも思ふべきに。彼等ハ父の徃方をしらん為に。遠く旅だちて思ふにかひなし。又缺皿が妹たる紅皿が不義より事起つて。わが夫枉死せしハ寔に脱がたき悪因縁に侍るべし。宣ふに任せて。助太刀をたのみまいらすべけれども。御身もわらはもいまだ老くだちたる身にもあらず。世の人になき名をたてられんもいと朽をし。志の厚きところハ。よろこぶにあまりあれど。この事のみはうけ引かたし。といふ。卯三二一聞て。この事。悉く理り也。しかハあれど。御身ハ仇人鉄平を認らず。われ又佐用丸を認らず。とかく<sup>29</sup> もろともに諸國を<sup>マニ</sup>へんれきし。さきに仇人にあはゞ。われ助太刀して討せ。又佐用丸のゆくへをしらバ。御身護かへりて國守に進らせ。事両ながら夫の志を継給へ。且紅皿ハわが伯父錦織郡司が名跡たる。源七とやらんが女兒にて。故郷を追放されたるもの也と。聞るは今がはじめにて。いよく憎べき毒婦ぞかし。もしわが淫心を發さんかと疑ひ給ふも。遠慮のいたす所なりとハいひながら。われもは一個の丈夫也。かゝる事には聊も苦しみ給ふべからずといひをはり。床にかけたる箱籠より。矢二條を拔出し。天地を拜して盟をなし。彼矢を押折て見せけれバ。

小舡も」このうへへとて。赤松殿に卯三二うさふじが申上まわすむねと。わが思ふ程ほどをも申述のべて。仇討あかまつどの事をねがひ奉たてまつり。且夫兵衛かつをつとひやうゑが志こころざしを繼つづて。佐用丸の御行方おんゆくへをも。素すまるとらせたき趣おもむきを申せしかば。赤松殿許容あいまつどのきよようり。洛みやこへも聞えあげ。さて敵討かんとう免許めんきょの御教書みぎやうしょに。引出物夥そへと添はなむけて餞別けんべつし給ふにぞ。小舡こぶねハいふもさら也。卯三二うさふじもふかく歛よろびび。旅の用意よういをいそがしけり。さる程に小舡こぶねハ。奴婢ぬめいに身の暇ひまをとらせ。奴隸しもべ團吉だんきちのみ。志こころざしめ信しんやかなるものなれバ。今度こんども彼かれを俱ともして卯三二うさふじとともに首途かどし。夫の仇人をつとをたきぞ索さづける。抑そらへ廣岡兵衛ひろおかひやうゑ。徃さきに壘くしの崇たかに係つきりて。冤枉むんじゆに陥おちける」<sup>30</sup>を。彼勇藏かのゆうざうが忠義ちうぎによつて。一トたび汚名おめいを雪きよめつるに。既すでに勇藏ゆうざう缺かけざらが。遠とほくこの地ちを離はなるゝに及びて。怨靈おんれいふたゝび殃わざはひし。一家いっけを殲こころしつくすに至いたる。正まさに是前世これぜんぜの悪業あくごう。皿さらを碎くだかバ殺ころさんと先祖せんそより定さだめたるを。兵衛ひょうゑが時に改ときるといへども。久しく徳とくを傷きよめし。因果いんくわハこゝに脱とけ得なれず。紅皿こうが事ことより起おりて。その身みはからずも鉄平てつへいが為ために殺さざる。しかばあれ兵衛ひょうゑが陰德いんとく。終つひに空むなしからずして。缺かけざら勇藏ゆうざうもろともに。久後絶ゆくすゑたえたる主家しゆうかを興おこす。これ他なし。皿さらによつて家いえを減あつし。皿さらによつて榮さかへをなす。先祖せんその悪政あくせい兵衛ひょうゑが陰德いんとく。その報むくひある事こと。すべてかくの如ごとし。嗚呼あゝたれ誰だかおそれざらん。嗚呼あゝたれ誰だか慎つつしざらんや。

## 盆石皿山記後編上果こう<sup>31</sup>

盆石皿山記後編下

### 曲亭主人述

#### 第八 因果の鑑いんくわ あしなべ

久米鉄平くめのてつへいハ。大澤おほさはにて卯三二うさふじ也と思ひあやまり。見みも馴なれぬ旅人たびとを切きり害ごろしておどろき瞭あはて。紅皿こうを將よて。山越やまこえに紀路きのちへ逃にげ去さり。名手なての里さとに僑居たびすましてふかく躲かくれ。なす事こともなくて徒たゞらに月日かづひを送おれハ。紅皿こうが竊ぬすみもて來たりし金かなも。早晚遣けはりひ果ははして。朝夕あさゆふの煙けぶりだに立たてかね。些ちよの助力ちよつきを乞こはんと思おもふにも。馴染なじみなき里さとはそれも相語かたづひがたくて。隱懸ひそかの報ほひかゝるべき事ことながら。紅皿こうハ鉄平てつへいをうらみ。鉄平てつへいハ紅皿こうを罵のり。日にくはんねんものあらがひのみして。こゝに半年としあまりを經へて。年としも暮はるれ春立はるかへりて。世よハ豊ゆたかなれども。いよ／＼飢渴きかつに迫せまりしかば。鉄平てつへいつく／＼思おもふやう。何なにとしいだしたる事こともなくて。女子よしを抱いへ。うか／＼とこゝにあらば。もろともに餓死うじにするの外ほかあるべからず。とかく紅皿こうを妓院ぎいんに



り」<sup>3</sup> てハ。凡一舛あまりも盜れたりとおぼし。われくハなみの旅人にもあらず。高野大師へ参るものなるに。かく後ぐらき事をなすハ。冥利に盡たる婦かなと罵れバ。紅皿も大に怒り。身におぼえなき事をいひかけられてハ立がたし。家にハ夫あり村にハ長あり。いかに貧くハ暮すとも。僅なる米を盜むものにあらず。盜れたりといふ證据あらバとく出し給へ。とく出し給へと叫びつゝ。禰もかゝるべき勢なり。みなくこの形勢を見てからくとうち笑ひ。所詮論ハ無益也。すべて高野へ詣するもの。邪をなすか。又これを冤んとするものハ。忽地大師の冥罰を蒙」  
（挿絵第五図）<sup>4</sup>



に放れず。こへいかにと驚き悲み。やよ道」<sup>5</sup> 者たち。はやく大師に勧解奉りて。助給へと叫びしかば。みな／＼或ハおそれみ。或ハ憐み。鍋の蔓へ手をかけて。引放さんとするに。項のみ只長くなりて。とみに放るべうもあらざれば。今さらに呆れ果。さればこそこの婦。米を盜る冥罰を蒙りたれ。わかれく高野へ参りなバ。よきに申て得さすべし。汝も又懺悔して。三十三度彼御山へ参るべしといふ大願を發し。信心解ることなくバ。鍋も安らかに放れなん。あら笑止やと散動て。おの／＼こゝをた

ち出たり。さる程に紅皿ハ鉄平が帰らざる隙に。彼鍋を打放さんと思ひて。鍋をもて搞などすれども。」たえて缺ず。強て打バ皮肉痛みて堪がたく。寔にすべきやうもあらねバ。今更に淺ましく。人に見られん事を恥て。破たる衣をうちかぶり。柱にもたれて居たりける。さてまた鉄平ハ。津國乳守に到りて。紅皿が身賣の事を相語。かの婦にハまづあらはにしらせざる趣を示あはし。妓院の主人を伴ひつゝ。往來三十里の道を次の日の夕ぐれに立かへり。と見れバ紅皿ハ物を被ぎて。筵屏風の蔭に蹲踞れるを。いと怪ながらしばく呼かけ。さるかたより客人あり。とく出たまへといふに。應もせず。鉄平大に焦燥て。今伴ひまゐらせ<sup>6</sup>。たるハ。御身が給事の事をせわし給ふ人なり。はやく立出て。もろともにたのみ聞えんとハせで。などやかく尻のおもたきといきまけバ。紅皿苔て。われハきのふより頭痛て堪がたし。御身よきに待してかへし給へといはせもあへず。鉄平声をふり立て。縦頭痛のすれバとて。その人にはれざる程の事ハあるべからず。とくくと呼びたつれバ。紅皿とかく迷惑して。今且く待給へ。少し愈なバ見えんといふ。この時鉄平ハ。妓院のあるじを招き入れ。只今女子を見せ候べきが。あやにくに頭の痛と申なり。まづ放やかに坐し給へと聞えつゝ。棚の隅なる桶の中<sup>7</sup>に。米のあるを見て密に歛び。又紅皿に對ひて。客人も長途を來給へバ空腹なるべし。われも又物はしき折也。鍋はいづかたにある。この米を炊て夜餐まゐらせなんといへバ。紅皿いよく迷惑して。鍋の事ハわれしらず。御身みづからたづね給へといふ。鉄平ハその故を曉らねバ。ふかく不審み。御身畠主してありながら。只一つの鍋のゆくへを。しらずといふことやある。はやく置たる処をしらせ給へ。やよくとてしばく問れ。紅皿今ハ苔んやうもなく。おし黙て居たりしが。且くしていふやう。御身よく物を思ひ給へ。家に一縉の錢も残しあかずして。き」<sup>7</sup>のふも帰り給はねど。今にもあれ立かへり給はんに。一塊の飯粒もなくハと思ひて。鍋を賣て米を買おきたりと欺けバ。鉄平大に呆れ果。この愚者更に道理をしらず。米を買たりしも鍋なくハ。何をもつて炊ん。賓も坐するに。飽までわれに恥見せける。憎さよと罵つゝ。壁に掛たる摺小木を引とつて。紅皿が百會のあたりを。ちからに任せて丁とうてば。ぐわんと響きて反かへす。これを見る妓院のあるじも。もろともに怪みて。江口の君の故事ならで。この婦ハ金仏の再來にてや在すらん。又生れ得て恥をしらぬ。鉄面皮にやあるらんとて。」衣の隙をさし覗けバ。鉄平ふたゝび摺小木を。閃して礎とうつ。打バうつほど紅皿が。頭ハ頻に鳴わたり。施餓鬼の寺に破罐の音するがごとくなれバ。婦も今

ハたまりかね。逃んとすれバ鉄平が又跳かゝるを妓院のあるじ。こハ短慮也とて抱き出。三人押あふふせや。うちあはつるまゝに紅皿ハ。圍爐裡へ足を踏こみて。撞と輾バ古拾のふはりと脱て頂に。すつば伏屋の中。執掌るまゝに紅皿ハ。圍爐裡へ足を踏こみて。撞と輾バ古拾のふはりと脱て頂に。すつばりかぶりしあし鍋ハ。なべて呆れぬものもなく。息を筑摩の祭ならずハ。鑑とられし落武者の途をうしなふに異ならず。縁故をしらざれバ。鉄平ます／＼腹たちて。戯も事にこそよれ。その鍋通せと焦燥つゝ。蔓に手をかけとらんとすれバ。紅皿もろとも引よせられ。頭痛〔む〕と叫ぶを脅はず。もぎ放さんと引にけり。されど首ハ抜るとも。弥勒の世までこの鍋の放るべうもあらざれバ。鉄平いよ／＼疑ひ迷ひ。大息つきて故を問ふに。紅皿今ハ置がたく。高野道者に宿かして。米を盃みし大師の冥罰にや。一たび被ぎたる鍋のはなれざる本末を物がたれバ。鉄平うち驚き。乳守の人間に聞するも。面目なげに見えにけり。妓院のあるじもこの形容を見聞して。掌を丁とうち。惜へしく。年紀のわからくて容止の艶麗なるを見てハ。身價百金ハ輒く出すべきものを。玉に瑕鏡に鑄。鍋を作り著たれバ。絶て物の用にたゞ。はるくの路を伴れて。畢竟路銀を費せしと。呟き／＼帰りければ。鉄平ハ較計ちがひて。頻に憤れどもすべきやうなく。いたく罵りてつと出んとするを。紅皿忙しく引とゞめ。こハいづ地へとて行給ふ。今伴ひ給ひし人の言葉にて。御身がわれをたばかりて。妓院へ賣。身の落着をなさんとし給ふ事ハよくしりぬ。しかるに思ひもかけずかゝる姿となりしを見て。いよ／＼疎み。おき去にして奔らんとすとも。やハ放さじと賣縁を。鉄平撲地と突倒し。そハいふまでもなし。神仏にも見すてられて。生れも得つかぬ廢人となりたる婦を。養て何かせん。われハわが身の安穩を。はからんと思へバ。いといそがし。そ」こ退べしとて踏にじり。走り出る足首を。楚と捉て引戻せバ。領蹴かへし後をも見す。鷺直に出去るを。紅皿ハなほ遣らじとて。轉つ輾つ追ひ來り。嘲情な男しばしまて。契りし昵言ハ偽り歎。われを捨てゆかんとならバ。大澤にて人を殺せし一件の事を訴て。からきめ見すべしと叫ぶにぞ。鉄平奮然として走りかへり。この婦を活おきてハ。わが為よからじと思ひしかば。紅皿が襟上臙て。野中の古井に撞と投入れ。大なる石を引起して。三ツ四ツ打こみ。井の中をとくと見て。から／＼と打笑ひ。膝のあたりの砂かきはらひ。いづ地となりける落穂ハ。嫉妬によつて本妻晚稻を菩提処の井に沈めつる報にて。その身畜生の子を孕て。非命に死し。今亦女児紅皿も野中の井に沈らる。夫缺皿が忠考の善報ハ。皿を碎くといへども成敗の



第九 熊野路の露

井を脱れ。紅皿が奸惡の冥罰ハ。鍋を被りて情人の為に井に殺さる。井によつたりて善惡をしる事。こゝに至りて三たびなり。巻を開く。〔ら〕くのはらはべたち。汲見て自の戒にせよかし。

ひて。こゝに來[た]りしといふ。鉄平縁由を聞いて大に慚愧し。彼が命つよぎに呆れて。ふたゝび殺すにしのびず。せひなくこれを伴ひけり。さても錦織外三二ハ。團吉とゝもに小舡を扶掖き。南海道を経歷して。高野山に兵衛が白骨をおさめ。それより熊野權現へ参らんとて。三人もろともに。羊腸たる山ふところの細道をわけ來れバ。いと怪しげなる乞丐女。笠をふかくして。道の次に立在めり。その頭いとおもげなれバ。こハ近曾人の噂する。鍋かぶりの女ならんとて。ちかくなるまゝによく見れば。彼鍋かぶりハ紅皿也。すハよきものに逢ぬ。これを捕て責問バ。鉄平が在処もしれざる事ハあらじとて。つと走りより。めづらしや紅皿。外三二を見忘れたるかと呼はりつゝ。既に引捕んとすれば。紅皿阿呀と驚き怕れ。後をも見ずして逃走るを。外三二ハなほ逃さじと追蒐たり。鉄平ハ少し後れて。おなじ路を來る折しも。外三二と名告る声を聞いて。忙しく笠をおろし。木蔭に身を潜めて待ともしらず。外三二ハ追こと一町許にして。忽地紅皿を見うしなひ。そこかこゝかとて見かへる処に。思ひもかけず。一叢繁き小松が下より。閃來る手裏劍に。吭を打ぬかれ。刀<sup>13</sup> 尖白く項に出。撲地と倒れて死しにたりける。小舡團吉ハ。外三二が後につきて。もろともに追來りしが。この景迹を見て大きに驚きさてハ仇人ハこのほとりに躲れ居るとおぼゆるぞ。とく撈出せとて。雨衣を盾とし。主従小松をかきわけく。わけ入る後に大男ハ忽然と立あらはれ。こやくと呼かくるを。主従見かへりて。ずかくと左右より詰よすれバ。彼大男ハ小松を押擣て尻をかけ。小舡主従をじろくと見やりつゝ。汝等何ものなれバ。外三二が方人するぞ。われ遺恨あるによつて。和州大澤にて討果すべかりしを。人違して旅人を切害し。けふまでハ助おきぬ。汝等命惜くハはやくゆけ。狼狽て。後悔せと嘲弄す。小舡團吉ハ。それと暁りて歎怒をなし。さてハ聞及し久米鉄平にてありけるよ。吾儕ハ大澤にて汝が為に撃れたる。播州山脇の郷士。廣岡兵衛が妻小舡。奴隸團吉と呼るゝもの也。汝も原武士の真似せしと聞つるに。恩に報するに仇をもつてし。剰その人を。詭討にする卑去さよ。夫の仇主の仇義に仗ときハ外三二殿の當の敵。古今は稀なる大悪人。いかでか天の羅を脱ん立あがつて勝負を決せよといきまきて。琫くつろげ詰かくれバ。鉄平からくと打わらひ。さ聞てハ汝等も助がたし。みづからはやう逃ハせて。思はぬ殺生さするかな。いで死たくハ望の」<sup>14</sup> とく。この世の暇をとらせんとて。笈の中にかくし持たる。太刀抜かざして跳かゝるを。團吉逆戦ふといへども。いかでか鉄平に敵すべき。瞞ふかく切こまれ。朱に染て倒るゝを。小舡入りはりて透間も

なく切てかゝるを。片手にて拂ひ除。乳の下四五寸切下れバ。噫と叫びて轉轍しが。刀を杖に身を起し。よろめきよろめく肩尖を。又一刀丁と切る。切られて肢體血に塗れ。遺恨の涙地を湿す。今般の苦痛に主従が。手足かなはねバ。鉄平を。にらみつめて息を吻き。朽をしきかな。いひがひなくも。われさへ仇の刃にかゝり。遂にこの野の夕露と消ともしらで。缺皿と勇藏ハ何國にあるらん。夢なりともしらせたや。それともしらずハ誰か又。われにかはりて仇人を討ん。寛に神明佛陀にも。見はなされたる身の果かと。主従互に薄命を。欺くも息の下也けり。鉄平ハじろくと。こなたを見やりあなたを見かへり。あなかしましきくり言。聞もうるさし。息の音とめんと立あがり。左右へ撲地と蹴かへして。足もて頭をしかと踏とめ。ぐさとつらぬく一刀。あはれはかなき最期なり。かくて鉄平ハ三人の懷中をかい探しりて。路銀を悉く集ひとり。手をあげて遙に招けバ。紅皿は彼廻の木蔭より走り來つ。點頭あふたる折しもあれ。ちかく聞ゆる」<sup>15</sup> 錚の音に。鉄平忙しく笈を脊にし。

紅皿も笠をふかくして。面をかくし。

脱れ避んとおもへども。この廻ハ荊棘ふかくして。只一條の細道なるを。避ん

ふかくして。只一條の細道なるを。避ん

とせば怪られん。誘と憚る氣色もなく

そなたに向ひてあゆみけり。こゝに

缺皿勇藏ハ。那智へ詣んとて。この路を

たどり來るに。深山鳥の頻鳴て。何とな

く胸うち騒げバ。後室小舟の事いと心

もとなし。今ごろハいづ地をか歷めぐ

り給ふらんなどいひ出て。暮かゝる

山辺をいそぎゆくむかひより。回國の修行者と笠ふかくしたる女道者と。つ

れたちて出來るに。路ほそやかなれバ。しばし傍に。立在互に撞木とりな



〈挿絵第七図〉」<sup>16</sup> ほして。むかへ回向の鉢の數。うちあはしつゝ遣り過し。ゆくこといまだいく

ばくならず。と見れバ松の下蔭に。三人いたく切られて死したるものあり。こハそもいかにと痛しみ。缺皿もろとも走りよるに。あな浅まし。殺されたるハ小船主従。今一人ハ認らねど。是なんちかこころこぼうぱいのものがたりに聞及べる。錦織郊三なるべしと。思へハ見れバおなじ日に。おなじ山路を来にけれど。今般にも得あはずして。やみく擊せし朽をしさよと。悔歎ハ。あなたにも。立とゞまりて紅皿がしバく指し密語を。こなたの二人は信と見て。さてハ今ゆきあひし修行者ハ。正しく仇人といひも果ぬに。飛來る手」<sup>17</sup> 裏鉄勇藏が柄杓にはつしと受とめたり。是ハと声をかけ皿があぶないことやゆふまぐれ。木がくれてはやく修行者の姿ハ見えずなりにけり。

## 第十 忠孝の世榮

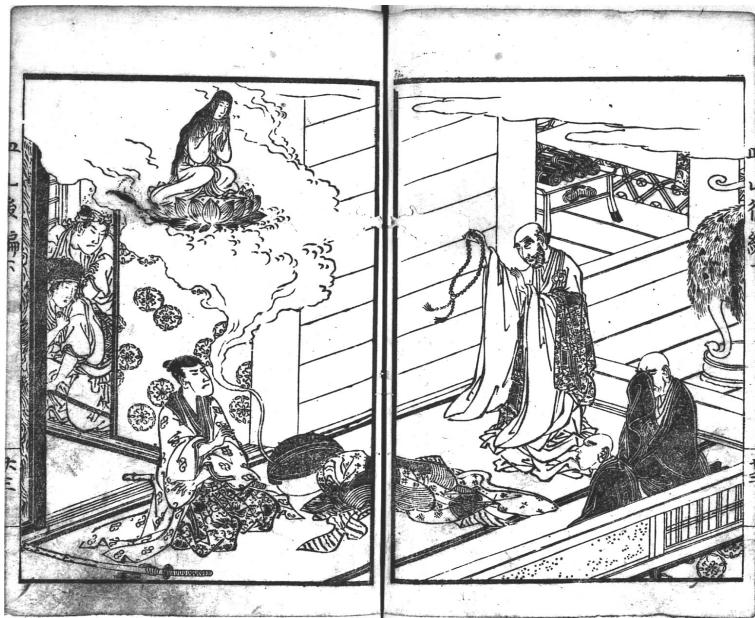
久米鉄平ハ。熊野路にて郊三三小船等を反撃にし。路銀夥棄ひとりて。紅皿を伴ひ。丹波國何鹿郡上林に來たりて劍法の指南をなし。久米氏なるよりおもひよせて。皿山鉄山と改名し。よろづはじめにハ似ず。衣食住の三ツ。その処を得たるが如し。こゝに亦通紅寂靈和尚とまうす。道高權智の聖<sup>ひじり</sup>おはしけり。山陰道の内にて。大伽藍を建立せんと思ひ。企給ふ事久しといへども。このころハ兵乱打つゞきたる後なれば。合力すべき檀那もなく。隱岐石見出雲伯耆因幡但馬丹後。この七箇國を勸化し給ふ事數年にして。今茲又二三人の徒弟を將て丹波に來り。若尾山光明寺に寄宿し給へり。こゝをもて遠近の道俗日々に詣て十念を受るに。利益饗の物に應するが如し。皿山鉄山ハこの事を傳聞て。つくづくとおもふやう。向に紅皿が。はからずも廃人となりたるとき。彼を伴ひて。世の胡廬とならんも朽をしけれバ。古井に推沈めて。全く殺<sup>18</sup> したりと思ひしに。それにもなほ死なず。能野まで追ひ來りて。いたくうらみ罵りしかば。曰<sup>お</sup>ことを得ずこゝへハ俱したり。しかれども彼も恥て朝夕引<sup>ひき</sup>こもり。たえて日影を見る事なく。われも又武藝の門人などにしられんかと影護試に紅皿を將て彼處に赴き。加持を乞ばやと思ひて。まづ紅皿に思ふ程をしらすれバ。すなはち行て。心を苦むるのみ。時しもあれ今光明寺に名僧來りて。病厄を祈禱するに。應驗掲焉と聞ゆ。われに紅皿を將て彼處に赴き。加持を乞ばやと思ひて。まづ紅皿に思ふ程をしらすれバ。すなはち行べしといふ。さて詰朝紅皿を轎に乗せ。鉄山みづから付添て光明寺に到り。群集の老弱にうちまじりて且くま<sup>しばら</sup>つに。數声の鐘高く響て。寂<sup>しづか</sup>靈<sup>りやう</sup>和尚二人の徒弟を從へ。屏風の後よりめぐり出て。鹿皮の柄<sup>じ</sup>を布設たる法坐の上に登り給ふ。その形容眉ハ白く鬚ハ長く。仙骨飄然として寔に尋常にあ

らず。さる程に渴仰結縁の老弱。おの／＼次才によつてすゝみ出れバ。和尚或ハ加持し或ハ十念を授給ふに。みな礼拜して退出づ。時に鉄山ハ。紅皿に衣打被せたるまゝにて。伴ひ出。この婦人難病あり。ねがはくハ和尚加持して給はるべしといふ。和尚しばし見そなはして頭をうち掉。これ難病にあらず。汝夫婦積惡の報によつて。弘法大師の冥罰」<sup>19</sup>を蒙りぬ。われ決して濟ことあたはず。しかれども懺悔にハ五逆十惡の犯人も。罪業頓滅せざるにあらず。一心發起して一事も覆ふことなく懺悔せバ。来世の苦難を脱れなん。いかに／＼と問給へバ。鉄山大に迷惑し。この事のみハ許し給へとて逡巡す。和尚又宣く。愚なるかな。密計も四知を脱るゝ「こ」となし。汝等いはずとも天地既にこれをしる。天地これをしるが故に。われ亦しれり。われまづこれをあかさんかと宣へバ。紅皿おそるく跂よりて。聖の宣ふところ理なり。わらハ是を申べし。願くハ濟給へと申つゝ。なほ膝をすゝめ。その身美作にありしとき。異服の姊缺皿を冤たる事。母の落穂が事。父源七が事。晚稻が事。又わが身故郷を追放され。錦織卯三二が庇を得。その妻世を去りて後。傍妻となり。鉄山が久米鉄平といひしとき密通せしに。その事發覚。鉄山潛に大澤にて卯三二を擊んとして。過て旅人を殺せし事。又名手の里にありしとき。わが身高野道者の米を盜たる冥罰にや。被せられし鍋の今に放れざる事。その折しも鉄山に突然されて古井の中に陥し事。熊野路にて鉄山が小船卯三二團吉を反撃にし。この丹波に來りて。劍術の指南する事<sup>20</sup>まで。首尾審に申けれバ。鉄山ハ全身に汗を流し。當惑固にあらはれけり。その時和尚莞尔として。善かな女人。この懺悔少しく罪業を減するに足れり。われ汝が心中を察するに。向に鉄山が為に古井に沈られたるをいたく恨めり。しかるに熊野路にて。鉄山が卯三二等を反撃にしたる日。なほ同意して路銀さへ盜せたるハ。いかなる故ぞやと問給へバ。紅皿苔て。宣ふ事にハあれど。わが身の苦さに人を怨み。おなじ道に引入れんとおもふが。煩惱のやるかたなきにて侍り。この身もし卯三二が傍妻とならずハ。今の苦難<sup>21</sup>ハせじとおもひし初一念ハ。鉄山をうらむるよりなほ甚しかりしといはせもあへず。こハ心も得ぬ卯三二ハ汝が為に恩人ならずや汝等恩を忘れて不義の行をなさずハ。彼も殺さんとハ思ふべからず。しかれバ彼に何の恨かあらん。いかにくと宣へバ。紅皿默然として回答なし時に和尚法坐をはなれてすゝみむかひ。

さら くだい み まぬか なべ いたゞき すなはちし  
盤を碎て井を脱れ。鍋を戴て便沈めり

くくひやくすく わかつ せんしん  
黑白都で余みづから淺深をおもへ

と高やかに説示し。珠數をもて衣の上より。りう／＼と」<sup>21</sup>  
ごとく。忽地見えずなりければ。鉄山うち驚きつゝ。遽しく被ざし衣を引除るに。只一つの鍋のみ  
残り。形ハ消てなかりけり。これを見るもの不可思議の法驗を感嘆し。一人の徒弟愀然として墨の衣  
を湿せり。暴惡無敵の鉄山も。身の毛いよたつばかりおそろしく覚けん。顔色土のごとくなるを。  
和尚見かへりて宣く。この女人汝が為に井に殺され。冤魂假に形を現じて。憑まつはりし事。敢期  
の一念によるとハイへど正に佛の慈悲して。その因果を諸人に示し。後世の苦難を「挿絵第八図」<sup>22</sup>  
打給へバ。紅皿が五體朝日に霜の解るが  
され。長くこゝにあらバ禍あるべしと示め  
し給ふにぞ。ます／＼驚き迷ひつる。  
周章て。寺の門を出去り。並松の下を  
走りゆくに。誰ともしらず打かくる  
手裏鉄。馬手の袂へはつしとたち。松  
の幹へぞ縫とめける。鉄山駭然として  
引抜見れバ。過つるころ熊野路にて。  
順礼に打かけたる。わが削刀にてあり  
しかば。ます／＼怪む折しもあれ。缺皿  
勇藏かひ／＼しく打扮て。両方より引  
抜み。いかに皿山鉄山。汝久米鉄平た  
りしとき。大澤にて撃れ給ひし。廣岡



ひやうゑおんこ いへのこ きむらゆうぢかげざら  
兵衛恩顧の家隸。木村勇藏缺皿<sup>23</sup>なり。

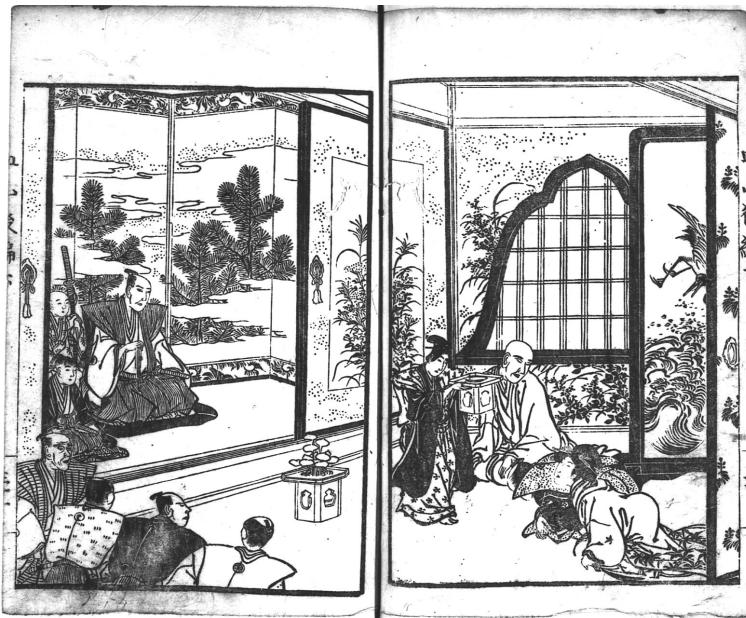
いぬるころ熊野路にて。後至小船。錦織卯三二等汝が為に反撃にせられ給ひし時。吾儕その処へ  
ゆきあはするといへども。事後れたるをもつて終に漏せり。今わが打かけたる手裏剣を見て。

汝忽地恐怖の色をあらはす。但速に打殺さるハ。その日行あひつる回國の修行者ハ。汝なるべしと猜しながら。なほ慥にしらんが為也。且缺皿が父源七ハ。錦織氏に由縁あり。しかれば汝ハ吾黨の為に千鈞の讐敵なり。わが兩人はからずもきのふこの光明寺へ参詣して。寂灵和尚に竭し奉りしに。和尚の徒弟角阿弥陀仏ハ。勇藏が叔父。缺皿が父なりける源七法師にて。不意の對面を遂げ。わがうへ審に物がたり。只このうへハ主家の仇を報ん事をおもふこと頻なりき。その時和尚をして宣はく。明日仇人皿山鉄山紅皿を將てこゝに來たるべし。彼紅皿ハ陽人にあらず。われ汝等が忠義を感するのあまり。彼女人を濟度し。仇をも輒く擊せなん。汝等その帰るを待て。本望を遂よと宣ふをもつて。今朝よりこの寺に來り。紅皿が懺悔によつて汝が暴惡悉くこれを聞り。今ハ翼ありとも脱るゝに道なし。はやく雌雄を決せよと呼れバ。鉄山驚とせしが打笑ひ。小ざかしき仇人呼ばり。」<sup>24</sup> 反擊ぞ觀念せよと罵りて。刀をすらりと拔はなせバ。缺皿勇藏左右より。刃をひらめか閃して打てかゝり。奮擊突戦時を移し。勝負もわかたざりけるが。忠義に凝たる二人が勇敢。



神明擁護の刀尖を。あしらひかねて鉄山が。受ながし。太刀すぢやうて。諸膝難て切たふすを。勇藏やがてやく乱るゝ処を。得たりやおふと勇藏が。透もあらせず踏こみ。右の肘を打おとせバ。缺皿直につけ入りて。諸膝難て切たふすを。勇藏やがても下向の老弱男女。四方に立こみ見物し。嗚呼と感ずる声。しばしが程ハ鳴も止ず。かくて勇藏缺皿ハ。群集を」<sup>25</sup> 〔挿絵第九回〕「押わけつゝ寺内に入れバ。門番の男扉を閉て。見物の人を遮り出たり。抑勇藏缺皿がこの寺へ詣て。源七法師に環會たる縁由をたづぬ

るに。件の両人熊野にて。小船卯三二等が反撃にせられし後に來かゝり。行ちがひたる修行者こそ。仇人ならめとて追蒐しが。遂にその往方を見うしなひて。遺恨やるかたなく。二人の屍をバ。ちかき山寺に葬り。それより山陰道に出て。丹波まで來たりし夜。夢の中に誰ともしらず告ていはく。汝等父にもあひ。仇をも撃んと思はゞ。火ハ凡にありて陰陽ならびゆく処に到るべし。と告ると見て夢ハ覺たり。二人此事を<sup>26</sup>相語て。つらゝ考るに。凡に火をおくときハ光の字也。又陰陽ならびゆくハ明の字なり。しかれバこのほとりに光明寺などいふ寺あらんかとて人に問へバ。若尾山光明寺といふ精舎。しかぐの処にあり。こゝに通紅寂靈和尚とまうす聖の寄宿し給ふなる。その利益灼然也とて。老弱日毎に群集すといふ。さてハ夢の告ハこの寺に詣よとの事なるべしとて。やがて彼廻へ索ゆくに。和尚の徒弟角阿弥陀仏と呼るゝ沙弥ハ。缺皿が父源七なり。互にこハいかにとて。且よろこび且うち泣て。兩人法衣の袖に携り。年來あくがれて諸國を索めぐれる事より。すべて身にかゝづらひたる「件」の事を物がたるにぞ。角阿弥は名告あはじと思ひながら。彼等が孝心の切なるに躊躇して。あらけなくも走り躰れ得ず。師父寂靈和尚遙にこの景迹を見そなはして立出給ひ。いかに角阿弥。佛も元ハ凡夫なり。子にあふ事をふかくな恥そと宣へバ。角阿弥はつとかしこみて。不覺に落涙し。さてその身宇奈手の森にて如此のあやしみを見て發心し。數年諸國を修行しつ。この春はじめて寂靈和尚に謁して。御才子となりし事。又わが法名を角阿弥陀仏と呼るゝ事ハ。われ宇奈手の森にて得たりし麻の角を。頭陀袋に藏て久しうもてりける」<sup>27</sup>を。和尚御覽じて。汝むかしこの蟹を殺せしより。一族みな殃に係れり。もしこれを濟度せざれば、汝も道を得がたく。子どもらも世にに出ることなしと仰て。おほけなくも牝牛両頭の蟹の為に。一七日の法事を執行し給ひ。剥彼蟹の角を経巻の軸となし給ひぬ。しかるにその夜両頭の蟹和尚の枕上に立てまうすやう。冤魂執着して夥の怨敵に殃せしも。今善智識の濟度によつて。畜生道の苦難を脱れ。走獸として人間に仇せし罪をしり。更に道徳無量の慈雲を仰ぐ。感悅何かこれにしかん。さればこゝろばかりの報ひをなし奉るべう思へども。たえて」獻すべきものなし。但し宿願のごとく一箇寺を建立し給んにハ。よろしき施主を導まゐらすべしといひをはり。かき消すごとく失たる迹に。年才五ツか六ツばかりなる稚兒。鹿の皮に裏れ。頭ばかりをさし出せるが。忽然として前にあり。和尚やがて皮を押ひらきて抜出したまふに。皮に裏れてより。夥の月日を経へ

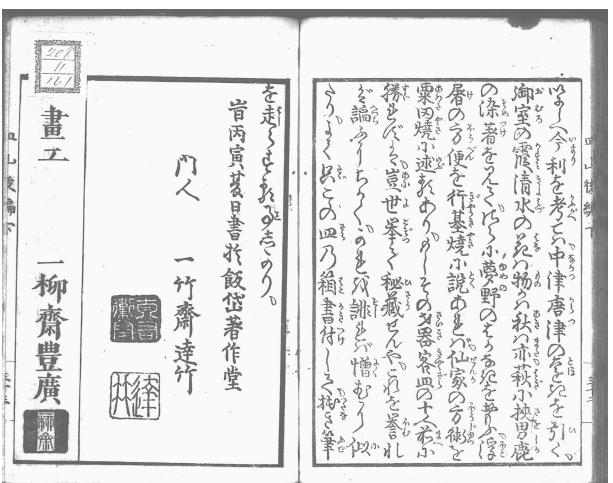
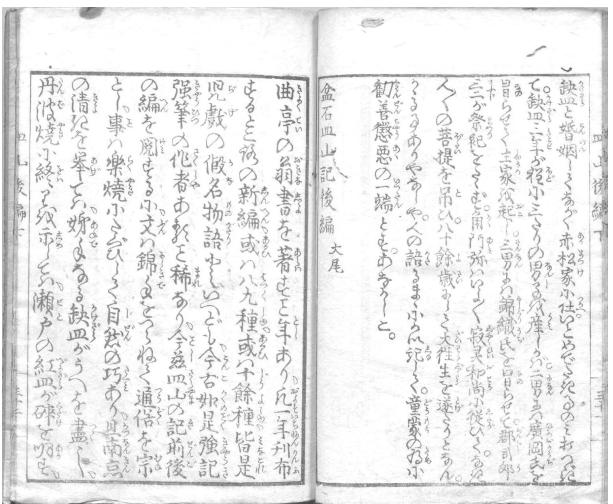


たりとハ見えながら。この子恙なくて泣声などもいと高きぞ不思議なる。和尚つくぐと見そな  
はして。これ平人の子にあらず。伽藍を建立すべき施主ならんとて。ふかく勦り。父の名を問給へど  
も。いふ事すべてさだかならず。時至らバおのづからしるゝ事あるべしとて。これを養ひ。彼輩の  
皮をバ裯<sup>28</sup>として。今なほ法坐に布せ給ふと物がたるに。缺皿勇藏大に驚嘆し。これ疑ふべうもあ  
らぬ。赤松殿の嫡子。佐用丸君なるべしとて。縁由を演説すれバ。角阿弥陀仏も。諸共に。不測の因縁  
を感激し。且晚稻。卯三二一。廣岡兵衛夫婦が枉死を悼み。紅皿が不肖を嘆じ。缺皿三重之介  
成長て。その志の移らざるを稱賛して。墨の衣の袖を絞りぬ。その時寂灵和尚宣く。角阿弥いた  
く歎く事なけれ。善に善報あり。惡に惡報あり。顯身の世に誰か脱ん。彼紅皿ハ既に鉄山が為に殺され  
たり。しかれども冤魂彼人畜縁て。しかぐの処にあり。明日件の兩人うちつれ立てこの寺  
へ来るべし。しかれ共生死道を異にするが故に。紅皿ハ衣をもてふかく画を掩ひ。その父を見る事  
あたははず。角阿弥も又その声を聞いて。その子を見ることあたははず。且かならずしも哭泣すべからず。  
われ汝等が為に紅皿を濟度せん。缺皿  
勇藏ハこの折を窺て仇を擊べしと宣  
ひしが。果してその言葉のごとく。露た  
がふことなかりける。さる程に缺皿勇  
藏ハ。輒く仇を擊とつて寺内に退き。  
鉄山の首を用て。兵衛夫婦。卯三二一。團  
吉等が靈を祭り。寂灵和尚に恩を謝し  
て。佐用丸を乞受。やがて播州へ立かへ  
れバ。寂灵和尚も角阿弥陀佛をさしそ  
えて。赤松殿に縁由をいはせ<sup>29</sup>給ふ。  
かくて佐用丸恙なく帰着し給ひしか  
バ。國守義則夫婦ハ申すもさら也。家隸  
老黨天に歎び地に喜び。勇藏缺皿が忠  
義を感激して已ず。これ併寂灵

たりとハ見えながら。この子恙なくて泣声などもいと高きぞ不思議なる。和尚つくぐと見そな  
はして。これ平人の子にあらず。伽藍を建立すべき施主ならんとて。ふかく勦り。父の名を問給へど  
も。いふ事すべてさだかならず。時至らバおのづからしるゝ事あるべしとて。これを養ひ。彼輩の  
皮をバ裯<sup>28</sup>として。今なほ法坐に布せ給ふと物がたるに。缺皿勇藏大に驚嘆し。これ疑ふべうもあ  
らぬ。赤松殿の嫡子。佐用丸君なるべしとて。縁由を演説すれバ。角阿弥陀仏も。諸共に。不測の因縁  
を感激し。且晚稻。卯三二一。廣岡兵衛夫婦が枉死を悼み。紅皿が不肖を嘆じ。缺皿三重之介  
成長て。その志の移らざるを稱賛して。墨の衣の袖を絞りぬ。その時寂灵和尚宣く。角阿弥いた  
く歎く事なけれ。善に善報あり。惡に惡報あり。顯身の世に誰か脱ん。彼紅皿ハ既に鉄山が為に殺され  
たり。しかれども冤魂彼人畜縁て。しかぐの処にあり。明日件の兩人うちつれ立てこの寺  
へ来るべし。しかれ共生死道を異にするが故に。紅皿ハ衣をもてふかく画を掩ひ。その父を見る事  
あたははず。角阿弥も又その声を聞いて。その子を見ることあたははず。且かならずしも哭泣すべからず。  
われ汝等が為に紅皿を濟度せん。缺皿  
勇藏ハこの折を窺て仇を擊べしと宣  
ひしが。果してその言葉のごとく。露た  
がふことなかりける。さる程に缺皿勇  
藏ハ。輒く仇を擊とつて寺内に退き。  
鉄山の首を用て。兵衛夫婦。卯三二一。團  
吉等が靈を祭り。寂灵和尚に恩を謝し  
て。佐用丸を乞受。やがて播州へ立かへ  
れバ。寂灵和尚も角阿弥陀佛をさしそ  
えて。赤松殿に縁由をいはせ<sup>29</sup>給ふ。  
かくて佐用丸恙なく帰着し給ひしか  
バ。國守義則夫婦ハ申すもさら也。家隸  
老黨天に歎び地に喜び。勇藏缺皿が忠  
義を感激して已ず。これ併寂灵

和尚の賜なれバとて。その法徳を謝せんが為に。義則すなはち泊野鞆原をもつて夥の錢財を寄進し。丹波に于て一箇寺を建立し給へり。今之永澤寺是ならん歟。是によつて寂靈和尚ハ年來の宿望を果し給ひ。又彼畠の為に禿倉を建。同國石川に鎮坐まします。春日明神の末社とし給ひけるとぞ。是より先勇藏ハ小船に賜たる。仇討免許の御教書を義則へ返進し。姓名を木村三重之介勇藏と名の告」  
 『挿絵第十図』<sup>30</sup> 缺皿と婚姻してながく赤松家に仕。いとめでたき事のみ打つゞきて。缺皿三年が程に三たりの男子を産しかば。一男にハ廣岡氏を冒らせて主家を起し。三男にハ錦織氏を冒らせて。郡司卯三二が祭祀をたゞす。角阿弥ハいよく寂靈和尚に從ひて。なき人々の菩提を吊ひ。八十餘歳にして大往生を遂たりとなん。かゝる事ありやなしや。人の語るまゝにかい記して。童蒙の為に勸善懲惡の一端とす。あなかしこ。

盆石皿山記後編(大尾)<sup>31</sup>



曲亭の翁書を著すこと年あり。凡一年刊布するところの新編。或ハ八九種。或ハ八十餘種。皆是児戯の假名物語といへども。今古如是強記強筆の作者あること稀なり。今茲皿山の記前後の編を閲するに。文ハ錦手をつらねて通俗を宗とし。事ハ樂焼にたゞひして自然の巧あり。且南京

の清きを挙てハ。姊手なる缺皿がうへを盡し。丹波焼に終りを示してハ。瀬戸の紅皿が碎を明す。いにしへ今利を考てハ。中津唐津の遠きを引く。御室の霞清水の花ハ物かハ秋ハ亦、萩に挾男鹿の染著を見て。さらに夢野のはかなきをおもふ。浮屠の方便を行基焼に説あれバ。仙家の方術を栗田焼に述るあり。もしその才器客皿の十人前に勝れずは。豈世拳て秘藏せんや。これを誉れば詔ふにちかく。かれを誹れバ憎むに似たり。よく只この皿の箱書付して拙筆<sup>32</sup>を走らする事しかり。

嘗丙寅夏日書於飯岱著作堂

門人 一竹齋達竹

〔太右〕〔達〕

畫工 一柳齋豊廣 〔一柳齋〕

畫工

金石皿山記前編二冊

先達而賣出

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

同 後編二冊



當春の新版  
此度賣出し申候

文化三丙寅年臯月上浣著述  
同四丁卯年春正月吉日發販

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

同 後編二冊

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

文化三丙寅年臯月上浣著述  
同四丁卯年春正月吉日發販

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

同 後編二冊

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

文化三丙寅年臯月上浣著述  
同四丁卯年春正月吉日發販

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

同 後編二冊

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

文化三丙寅年臯月上浣著述  
同四丁卯年春正月吉日發販

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

同 後編二冊

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

文化三丙寅年臯月上浣著述  
同四丁卯年春正月吉日發販

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

同 後編二冊

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

文化三丙寅年臯月上浣著述  
同四丁卯年春正月吉日發販

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

同 後編二冊

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

文化三丙寅年臯月上浣著述  
同四丁卯年春正月吉日發販

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

同 後編二冊

金石皿山記前編二冊

先達而賣出  
此度賣出し申候

